

蹴 球

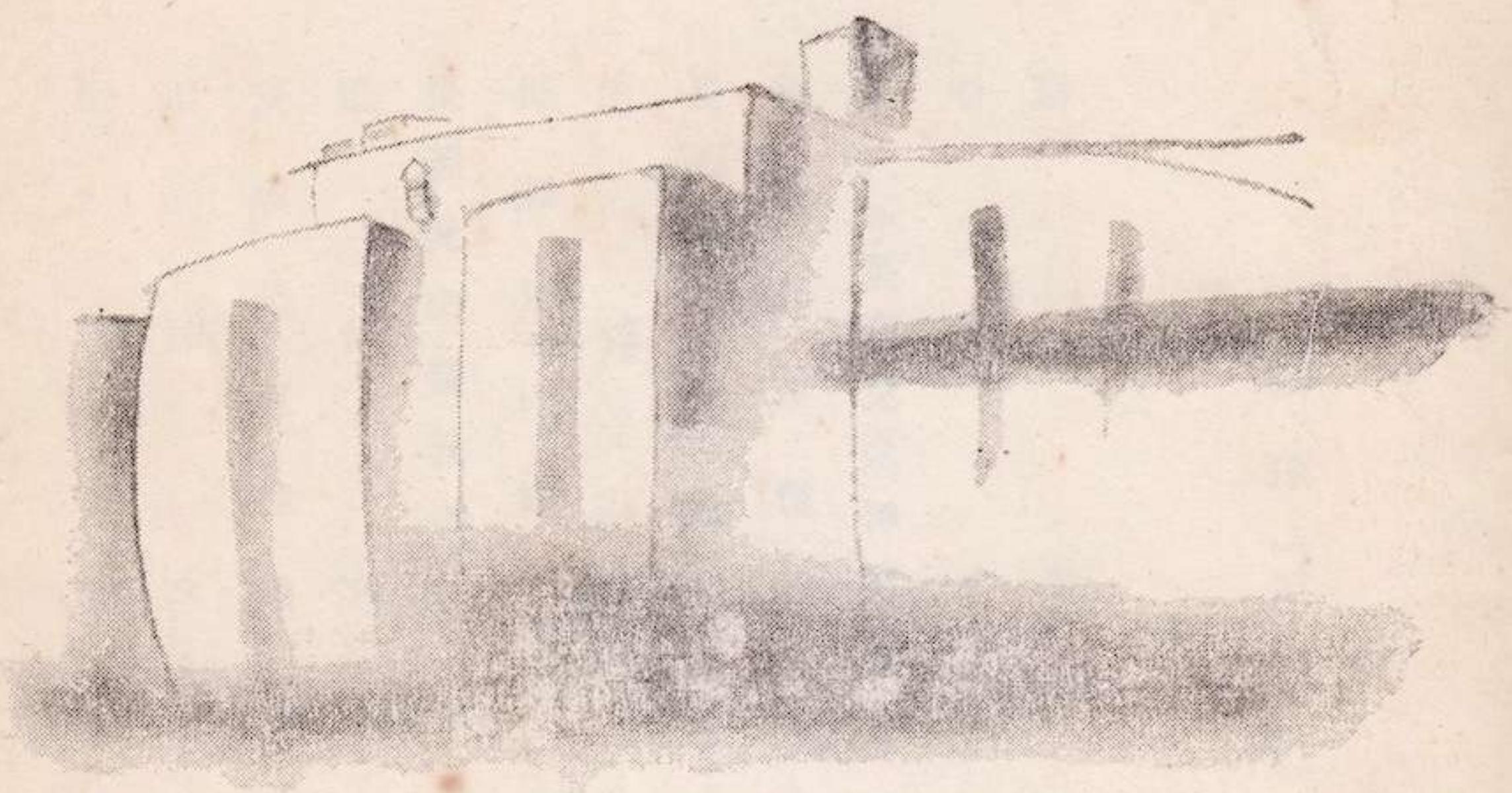
第 五 號

長瀨兄追悼號

October — 1938

東京商科大學蹴球部部誌





70

號五第

グランドに這ふ

三

嘴

茂

◆新入生感想集

新入生紹介

編輯部

部

公

入部挨拶

橋青木

育

郎西

入部査表

萩原

伊器

夫会

入部偶感

瀬藤

俊

雄全

入部所感

三嘴

公

入部所感

茂公

入部所感

一橋

部

公

入部所感

編輯部

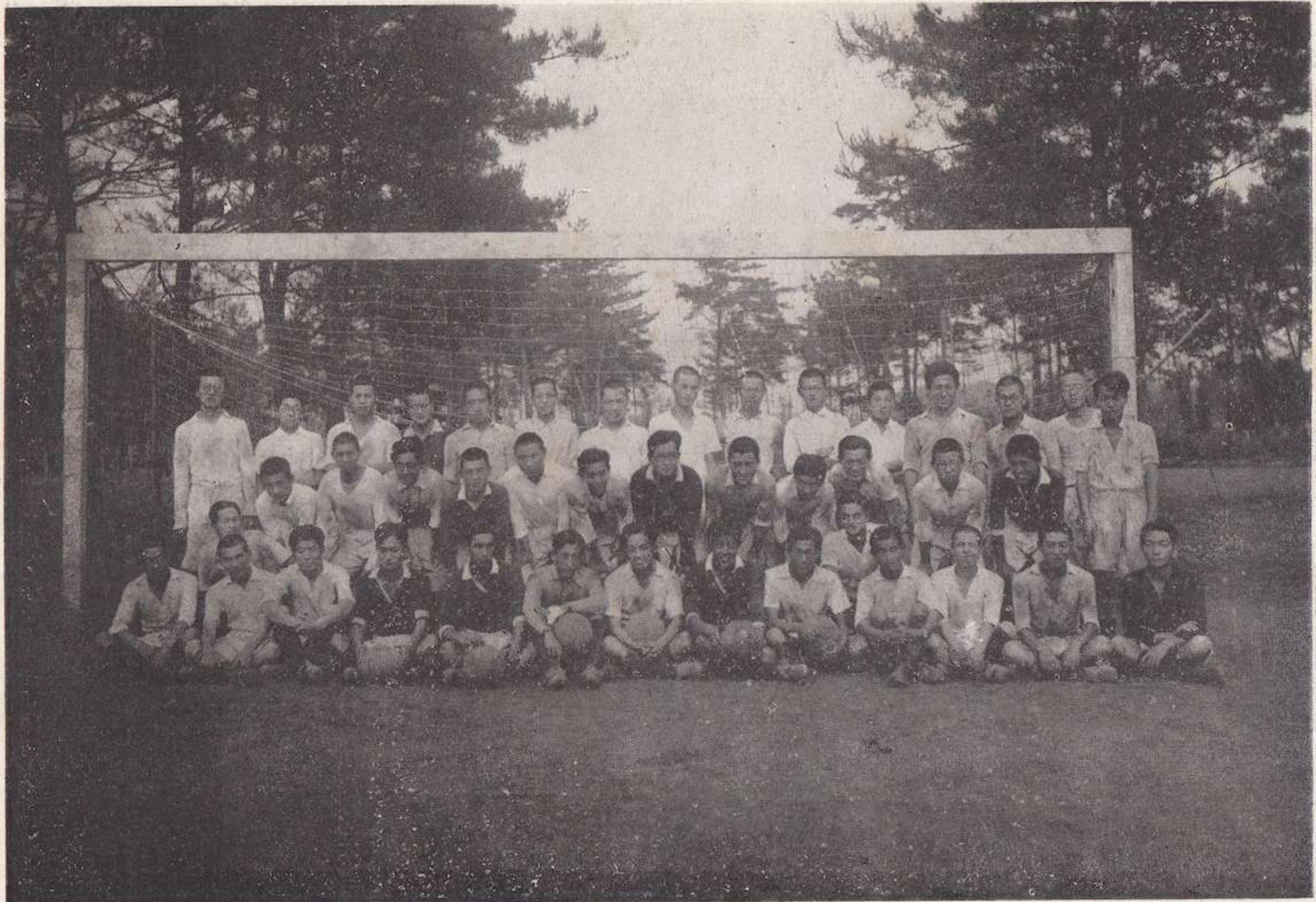
部

公

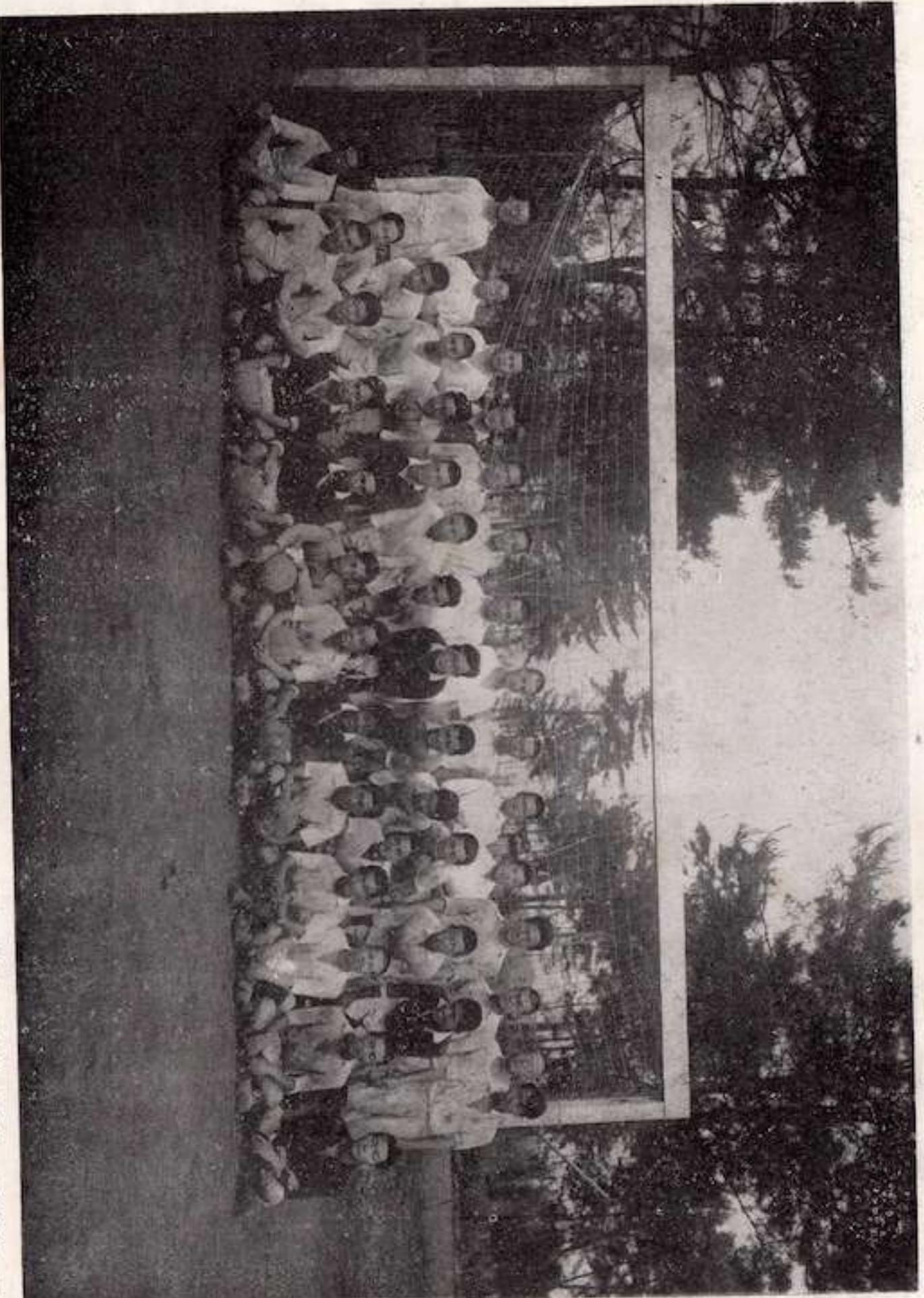
今は亡き長瀬東作兄



昭和十三年度送別記念寫眞



前列向ツテ左ヨリ 宮崎、高橋、菅瀬、大掛、鈴木、淺田、林田、村井、重見、池尾、石割、茂木、二階堂、水島。
中列 堀尾、松岡、清水、米山、淵上、藤塚、岩崎、狩森、後藤、清水、金井、鈴木、小西。
後列 居川、櫻井、早野、吉澤、吉田、一人置イテ宮澤、一人オイテ村木、二人置イテ片山二人置イテ荒川。



前列向シテ左ヨリ 宮崎、高橋、菅原、大掛、鈴木、淺田、林田、村井、重見、池尾、石割、茂木、二階堂、水島、
中列 鳩尾、松岡、清水、米山、潤上、藤塚、岩崎、荷森、後藤、清水、金井、鈴木、小西、
後列 居川、櫻井、早野、吉澤、吉田、一人置イテ宮澤、一人オイテ村木、二人置イテ片山二人置イテ荒川。

卷頭三言

リーグ戦も二旬の後に迫つた。

商大蹴球部は今試練の鐵壁に全身を以て突き當らうとしてゐる。それは、凡ての意味に於ける力と力との戦ひだ。

此の戦ひに勝つためには、此の鐵壁を突き破るには、三十六人の體當りがあるのみだ。

一人一人の心の底から、腹の底から溢れ出る氣魄が一つの力にならなければ勝てないのだ。

焦らず、怯まぬ捨身の腰が据はつてゐなければ彈ね返されるのだ。
とつしりと腰を据ゑて、お互の手をしつかりと握つて、全身に漲る激しい鬪志でぶつかつて行くのだ。

長瀬さんが教へて下さつた様に、戦場で身を以て示して居られる先輩達の様に、商大蹴球部を生き抜くんだ。

長瀬君を憶ふ

川村通

死がかう迄突然に君を喪はうとは思ひも掛けなかつた。つい身近に何か急にうつろなものを見た様な氣がして仕様がない。分り切つた事ながら僕等が今後どんなに長生きして見た所で二度と君に會へぬかと思ふと云ひ知れぬ淋しさが込上げて来る。昭和三年の春だつたかと思ふ。君が若々しい學生々活のスタートを切つた頃に、僕は既に學窓を去つて居た、お互の年齢には十年の差があつた。併し一筋の縁の糸が不思議に我々を結び付けてくれた。糸は我が蹴球部である。妙なもので、部に關係ある者は誰も彼もが部の事と云ふと夢中に成つた。年も忘れた。境遇も忘れた其他あらゆる個別的條件を忘れ去つた。そして只同じ純一の目的に向つて生きがひを見出さうとした。それは實に不思議な心の通ひ路とも云ふべきものだつた。けれども出不精な僕には此の僅か一筋の路を通じてさへ、君と相見えた機會は少かつた。それでも君が敬愛すべき人柄を知るには充分だつた。それ程君の爲人には強く心を惹かれるものがあつたのだ。

入學したての頃の君は、其の時分から何處か犯し難い凜とした風貌乍ら流石にまだ無邪氣な坊つちやんらしさを見て居た。それが其後年を加へて會ふ毎に何時の間にか立派に鍛へられた賴もしい人柄に變つて行つた。此の目覺しい變り方に密かに驚異の目を瞠つたのは僕一人だつたらうか。それと同時に一時沈滯氣味だつた蹴球部もいつしか見事に立直つて、今度は隆

々たる發展の経過をとつて行つた。それも其の道理だ。當時の君と蹴球部とは所詮別箇の存在ではなかつたのだから。君は在學中一時健康を害された。併し此の不幸事すら君にとつては人格完成への一階梯に過ぎなかつた様に見えた。

斯くして磨き上げられたる君の美質は誠實にして快活、周密にして大膽、明智、大量、不屈、果斷、烈々たる闘志と涙弱い人情味、等若年五尺の一身に些の矛盾も撞著も無く、よくも集め得た徳の數々である。而も打見れば稍々瘦形乍ら筋金入りの四肢五體、觸れば錚々の響ありと云ひ度い賴もしい若人ぶり。正に棟梁の材、將帥の器である。

昭和九年春、の研鑽の功成つて優秀の成績もて卒業せらるゝや君は三菱鎌業の新社員として勇躍任地九州へ向つた。當時君が抱懷せる遠大の理想は果して何々ぞ。前途洋洋々、君を識る者誰か君の大成を信じ、將來の多幸を祝福せぬ者があつたらう。入社後の御様子は殘念乍ら直接に知る事を得なかつた。併し上下同僚すべての信望と敬愛とを集められた事は折々傳聞し得て喜んだ。

嗚呼、思へば人の命數は分らぬものである。僕も君と前後して病臥の身と成つて居た。そして今秋辛くも再起の日に遭つた。それ故に一入深く無常の感に打たれる。

古來天くして逝く者には神佛の恩寵特にめでたいものがあると云ふ。凡愚三惑具足の僕等にも時に腕氣ながらかゝる攝理の妙が窺はれる。惟ふに君が人格は短年月の間にして能く玉成の域に到達した。全く常人の企及し得べき所でない。だから君が靈は早くも神佛に召されたのである。

今支那に聖戰の陣が進められつゝある。我等の親愛なる舊部員の誰彼も戰場に在る。併し戦は到る所にある。生きて行く事自體が戰なのだから。而も皆激しい亂軍の裡に只管進撃を續けて行く。君は名譽ある戰死者だ。君の遺志を空しくしてはなら

ぬ。而て君の遺徳に肖りつゝ正しく生きて行く事こそ残された戰友達の責務である。

目を閉ぢて在りし日の君を偲べば、君はある淺黒い引緊つた顔に微笑を湛へて立つ。嗚呼、長瀬君。

話の泉

春の合宿の練習で、最後のダツシユを小西主將と後藤^{トトロ}さんとの競り合ひましたが、胸一つで小西さんの勝。

虎「俺はフォームに氣を付けてるからね」

傍から

早野「さてはトラホームか」

×

×

×

×

×

×

村井「そんなら五人づつ見て下さい」

後藤さん皮革使用制限中なるを以て、ブヨ／＼のボーリに油を塗つて手入中。

米さん「ゴツツアン、いくらなんじちそのボールは駄目ですよ」

村井先輩が未だ角帽を被つて居た昨年の事、文部省に豫科生共を十人程引張つて診察を受けに行きました。

給仕「五人以上の團體はあらかじめ申込んで置かなくては困りますね」

は鋭い。

長瀬東作君を悼む

豊田達治

君の急逝を知つて茫然として涙も出ない。

あれ程元氣一杯な朗らかな君が不幸病魔に冒されたと聞いて例の如き君の負けん氣が會社の仕事に現れて君の體力との均衡が少し破れた位だとしか思はなかつた。九州から東京へそれから片瀬へ轉地療養されてる間も君の御父さんや御兄さんから君の元氣な事を伺つてひとりで安心して居た。やがて君が英氣を充分に養つて捲土重來立上る日の近きにあるだらうと確信して居た。

然るに今日、秋深く哀傷いやまざる頃も頃とて忽然として君の訃を聞くとは、恐らく君をしる誰もが意外とした處であらう。今更乍ら君との交誼を顧みて君程周囲の人々を明るくさせる零面氣を身に備へて居た人を知らない。家庭にあつても君を最も愛した父君母君兄君又弟さん妹さん方によつて實に良き子であり良き弟であり良き兄であつたらう。君は又吾々によつて實にくくに良き友であつた。

而も君の前途は誠に洋々たるものがあつた。大膽で細心、そして勇氣が有り親切だつた君の天性のために多くの友達が勵まされ慰められた。學問にスポーツに娛樂に各方面に示した君の才能と努力は吾々グループの推進力だつた。

嗚呼！其の君が今は無い。

君の御家族の御嘆きは勿論吾々君の友達として手をとりあつて前途に希望を抱いて居た者達には君の天折が如何許り心を痛めしめたか言葉には盡せない。併し君の残した足跡は益々花を開き實を結びつゝある。君の卅年に足らざる短かき生涯に一番君の熱情を傾けたスポーツを例にとれば現在商大蹴球部の華々しい活躍振りが君の薄かれた種の花であり實である事を誰もがうなづくに違ひない。

時局多端の折吾々のグループからも君の良きパートナーであつた義弟二階堂君や水島君等が軍務に就かれて居る中で只管の生前の厚き友情を偲びつゝ君の靈の安らげく眠らわん事を祈つて筆を擱く。



追悼文

吉 豊 三

前略

拾月二十一日夜蹴球部から「東作兄突然逝去す」の電報を受取つて眞に驚き且つ悲しみました。

憶へば今年の正月片瀬で君を見舞つて以來御無沙汰をつゞけて來たのですが最近兄に會ひたい念の切なるものがありました。それで二十四日の日曜日は今度こそ片瀬に行くべく決めてゐましたが

矢張り蟲の知らせたつたのでせう

貴兄達の中には一緒に球を蹴つて居た方もゐられる事故、今更僕から申上げるまでもありませんが長瀬兄と蹴球部とは切つても切れない縁でした。

學校生活六年間實に蹴球部のために没頭したとも言ひ得るでせう。

僕は豫科一年からのクラスも一緒でしたし共に四年間球を蹴つた。又本科二年からのゼミナールも一緒でした。

根岸先生のゼミナールに入れて貰ふ時も俺達は本を澤山讀まされてはたまらないし理窟ぽい事を勉強させられるよりは先生から物の見方を教へて貰ふぢやないか」と云ふ次第で（先生に對しては甚だ失禮ですが）豫科一年蹴球部に入り来て以來吾々

の面倒を見てくれた部の先輩の大半は先生のゼミナールであつたし、そして兄と何事によらずお互に自信のない事は皆相談したものでした。

乍然僕の不勉強と異り兄はいつも計画を立てて良く本を讀んだ。

兄は話好きで又座談は巧だつた。

議論をするといつも僕の負で、何かの時だつたか、「吉村の結論は良いんだが途中論法は零だ」と云はれて全くすぐつたく思つた事があつた。

だから決して意見の対立等を起した事もなく第一人をそらすやうな事がなかつた。

先輩は常に敬ひ一方後輩は非常によく面倒を見て可愛がつた。

諸兄も必ず兄の家を訪問されたこと、思ふ、若い人達も家には相當集まつたやうだし又兄は時間のないに不拘常に愛想よく待遇してゐた。又其の暇に一貫した見解を持して勉強も怠らなかつた。

所謂寡言實行型で餘り理窟ほい事は口にせず常に實行の努力を怠らなかつた。快活な抱擁力のある氣質も大に手傳つてゐるが實際の言動で周囲を感化し導いて行つた事は、しかも其が何等の作爲的で無かつたが故に今にして憶へば實に偉大にさへ感じられる。

第二部に居た部に入つてからも下りに下つて第四部迄落ちて行つた當時の蹴球部の不統一、焦燥悲觀を自分一人で身に實感して奮闘を緩めず纏め上げて行つた。そして勿論諸君の絶大なる後援に待たねばならなかつたのであるが遂に今日の部、隆盛の基礎を作り上げた、實に兄の偉大なる業績である。

卒業の前年の事だつたが丁度僕は先生の御指導で「ファシズム」の理論付けをやつてゐた時、僕の下宿で判りもしない知行一秋の哲學とか全體主義とか大に論じた。

其の時黙つて合槌を打ちながら聞いてゐた兄は最後に「俺もお前も結局同じ考へ方をする様になつた、俺はこれまで蹴球生活の體驗から常に全體を考へて物を觀るやうになつた」と云つた。全く其時は「俺は負けた」と云ふ感じで冷汗をかく思ひがした

今僕には兄の在りし日の事業が切々と思ひ出される、今兄を失つたことは餘りにも惜しい。

卒業後三菱鑄業での生活は年數も少く餘りに多くは聞いてゐないが、其の間も仕事に没頭する傍ら勤務後の短い時間疲れも忘れて學校に行けない給仕達に英語をへ教えてやり精神教育、やつてゐたらしい。

これも兄の慈愛に満ちた心情の麗しい露れであらぶ。

至るところに作爲なくして周囲を感化し崇拜者を持つた兄だ。

或は後、拾年の歲月を籍せば必ずや確固たる地盤の上に更に意義ある仕事をなし遂げたであらうに眞に愛憎の情禁じ得ない。

諸兄も顧はくば在りし日の彼を憶ひ彼の意志を何卒蹴球部へ生かしてやつて下さい。
たまゝ蹴球部の村井君から「蹴球」長瀬記念號に余稿を頼まれましたが哀悼文と名付けるものを書き不得諸兄に對する御返信に代へて申上げる次第です。

十月廿七日

敬具

吉 村 豊 三

長瀬兄に捧ぐ

荒井文雄

長瀬さん!! 僕が先立つにせよ、

あなたが先立たれるにせよ、何れは御別れせねばならない運命と思つては居りました。然し斯んなにも早く御別れしようなんて……實際僕には信じられません。

あのグランドの「荒井走れ!!」と言ふ聲が耳元に強く残つてゐるのに、いやあの腰越の夕、呵々大笑した時の面影がハツキリと伺はれますのに、又神宮で帝大に敗れて涙を絞つてゐる選手を一杯涙をためて激励してたあの顔、東京驛で去り行く謹坊を何時迄も見送つてゐたあの瞳、今仰ぐ寫眞の御顔もあの時あの儘なのに、今はもう幾ら呼んでも歸つて来てはくれないのですか、

長瀬さん!!

あなたは何でも彼でも之と思つた事をばなしとげて終ひましたね。之はと思つたら決して退かない眉宇の相、然も裏にあつては何時も暖く抱いて呉れた兄の心、それ故みんな水火をも辭せぬ心で従つてました。

惡戦苦闘幾年、蹴球部は兄の力で漸く一部へ上つたのでした。

黙々たる兄の眦から發する意志の力の前には何ものもなかつたのでした。動かす事の出来ないあの人格と意志の力!!

それなのに、如何して病魔文破り得なかつたのか、否あの強い意志と努力の前には病魔だつてたちくへだつたのだ。もうあなたの顔には昔の元氣な面影以外の何ものもなかつたのだ。あの笑顔が、あの聲がすべてを物語つてゐたではないか。腰越の夕べ、東京驛の再會、僕はもう大丈夫だと思つた。

それが瞬時に命を奪ふなんて神様は如何したのですか、あの元氣になられた事が今は却つて怨めしい。

神宮へ試合を見に來ると言つた時、謹ちゃん始め一同如何なに御止めしたか分らなかつた。然し母校蹴球部存亡の秋、兄の母校愛は身を顧みる所ではなかつた。

神宮で敢なく帝大に敗れた日、兄はどんなに嘆きどんなに憂慮した事か、然もそれが、兄に御目に懸けた最後の試合になるなんて……。

長瀬さん!!

あなたには到底御恩返しする事が出來ませんでした。豫科の何も知らない頃から學校の六年を通じそれ以後を通じ身を以て與へた教訓の程又、稍もすれば方向を誤まり荒み勝ちな私達の心を慰め抑へて下さいました事。時には父の如く、兄の如く時は又母の如く姉の如く、然も侵し得ないあの面影。何時かは御恩返しをしようと思つてゐたのに、それももう此の世では出来なくなりました。

長瀬さん!! 嘸無念だつたでせう。

常に父に、又母に兄弟姉妹に感謝し、其の愛を語つてゐた兄が、獨り此の世を旅立つなんて、親の事を言ふと必ず孝行と言ふ

兄が、兩親に先立つて旅立たれた事はどんなにか殘念だつた事でせう!!

然し、長瀬さん！

あなたの生涯は實に立派だつたですね。荊棘の道を、凡人ならば必ず躊躇するものを、黙々として切り拓いて行つたあの努力、理想もあなたの前にはユートピアではなく實現の世界だつた。どんなに苦しい時でも、辛い時でもあなたは決して「苦しい」とも「辛い」とも言はなかつた。

身には油汗を流しても額には苦惱の色がハツキリと讀まれる時でもあなたの口からは泣き言はなかつた。

あゝ之が英雄兒でなくてなんであらう。

然も、其の眠は又大往生だとは承ります。此の人にして始めて出来るものと僕達は思ふのみです。

長瀬さん!! 僕達は何時迄も嘆きますまい。女々しい涙は見せますまい、日本の男が何で泣くものか、あなたは去つてもあなたは死んでも、何であなたの魂が滅ぶるものか殺せるのか、何時も何處からか、あなたの魂はちつと此の世を見守つてゐるのだ。

長瀬さん!! 今蹴球部は存亡の秋に立つてゐます。苦しみを苦しむ時に立つてゐます。

然し苦しい時こそ身を賭して頑張るのです、それは長瀬さんが生涯を通じて後輩に與へた不滅の教訓です。

長瀬さん!! 僕達は頑張ります、苦しめる丈夫しみます。男が何で挫けませう。如何なる運命の下に於ても嵐の下に於いても男一匹の命を投げ出して世に處します。

長瀬さん!! 如何か御やすみ下さい。あなたの魂は永遠に燐然と輝くのです。

長瀬兄の書翰より

淺枝彦太郎

前略。

俺は信せられなかつた。長瀬氏が死ぬなんて。原稿なんか書く事も無いし、書けません。何故死んだんだらう唯斯う思ふだけだ。

原稿よりも在鮮中彼から貰つた手紙が二通ある。別便で送りますから僕の原稿として追悼號に載せて呉れ給へ。僕の記念だから、何時迄も取つて置きたいが、地下に眠る長瀬兄を偲ぶよすがともならう。長瀬御兩親に僕の意を傳へてお返しして呉れ給へ。

一月八日

大掛君

◆五月八日 腰越より

拜復。

御便り有難く拜見致しました。其の後如何なさつたかと案じて居ましたが、貴兄の本意通り無事京城御着任の趣承り、何よ

り茅出度き事と安心致しました。更めて御慶び申上げます。又白今大いに自重研讀十二分に貴兄の眞面目を發揮され、大活躍されん事を祈り上げます。

丁度去る四日夜上京、諸用を済ませて昨夕戻つた爲、御返事が遅れましたが、滞京中一寸會社へ行つた歸途、角田君を訪ねて、初めて同君の背廣姿を見、又事務室の模様を見て來ました。荒井君、田島君の所も訪ねたく思ひましたが、地理不案内のと、隙の時間はあつても、未だ體力が云ふ事をきかぬのとで斷念しました。角田君も元氣で居ましたが、隨分暇の様でした貴兄の方は嘸周圍の活氣も強く、何彼と張切つて居られる事でせう。

「鐵は赤い中に打て」と云ひます。今の張切つた、溢れん許りの元氣と、旺盛な研究心の中に生活の設計と大局觀を確立されん事をおすゝめ致します。所謂世俗なサラリーマンにならない様に。

謹司君も相變らず元氣。近日部の人を呼んで新家庭被露旁々大いに氣焰を上げるとか云つて居ました。其の他の人には會ひませんでしたが、部の方はもうどんく練習試合をして、慶應には負けた四一二とか云つて居ました様ですが、文理大には勝つた由。来る九日には明治とやるさうです。僕も隨分元氣になつて散歩もして居ますから、其の中には試合を見に行けると思つて居ます。

四月五日、當地へ來てから調子甚だ宜しく、愈々太り初めました。病氣も底を入れて恢復に入つた様です。今度上京したのも、丁度若松支店長の次席の人が、洋行の準備傍々上京したので、御目に掛るのが、第一の用件だつたのですが、何時迄休んでも宜しいから、すつかり好くなる迄落付いて養生なさいと、懇々と注意されて來ました。僕自身としても昔の無理を今一度やらうとは思はず、徹底的に、又普通の人以上に健康を取り戻したく、うんと腰を据えて養生する積りです。幸ひ前述の様な具合で、恢復に向つてますから、手綱を引きしめて優勝に向つたあの氣持で着實な静養をして大いに實効を上げる心算です。當地はもう、少し暖か過ぎる程で、濱の散歩も快適です。讀書も少しづつ続けて居ます。何か頭に残れば結構。讀書の習慣だけでも付けば幸甚と思つて居ます。そちらに好い本屋がありますか。若し希望の書籍があれば云つて下さい。東京で見付けて御送りしますから。

では又お便りしませう。吳々も體に注意する様に。

五月八日

彦太郎様

◆九月十一日。腰越より。

謹啓。其の後すつかり御無沙汰、何とも申譯ない。貴兄は相不變元氣に張切つて御勤務の事と思ふ。何より結構、益々自重自愛、愈々君の眞面目を發揮して、活躍されん事を祈る。小生御蔭様にて追々と快方に向ひつつはあるものゝ、何日から働く事になるのやら、一寸見當も付かず、淋しい限りだ。今年中は勿論駄目。來年四月も何うなるか？ だ。併しすんく元氣づいて來る事は確かなのだから、何卒安心して下さい。四月に鈴木、大掛に會つた頃から見れば、今は雲泥の相違だ。とは云へ、今日の體で、去年休む直前程働けるとは思へない。尤も緊張の問題だから、やれば出來ぬ事も無いのだらうけれど。既に休んで一年近く、今更あはてゝ無理しやうとは思はぬ。徹底的恢復を目指して居る次第。

伺へば、貴兄の弟さんが出征された由。貴兄の感慨や如何に。唯心中を邸察しするのみ。二階堂は去る二十九日、九月一日より一月の入管爲、歸廣した。併し周圍の事情から一月して上京出来るものか否か解らぬだけに、東京驛で別れる時は何と

も云へなかつた。只念する事は早く事變が終了して平和が恢復される日の一日も早い事だ。

夏中の一 日、荒井、田島、角田等が來て愉快な日を過した。丁度謹坊も來て、弟妹等と一緒にバレーボール、果ては蹴球に歸る頃はふら／＼になる程暴れて居た。東京に居る若い連中は何と云つても會ふ機会に恵まれて居るだけ幸福だと思つた。森田から便りのある毎に九州で會ふ日を樂しみにして居ると書いてあるけれど、無理が無い話だ。貴兄も會社の用事、其の他上京すべき機會があつたら是非通知して欲しい。去る八月二十五日夜、蹴球部の合宿開始に當つて、いさゝか激勵したく出陣式を小平でやつた。僕は新宿驛迄しか見送らなかつたけれど、謹坊、荒井、田島等が出掛けで呉れた。此のあつせんは専ら荒井がやつて呉れたのだが、今後荒井、角田、田島等が所謂先輩團の幹事として學生さんとの折衝にも當つて貰ふし、又何彼につけ、まとめ役をして貰ふ積りだ。君の上京歡迎會も勿論やつて貰ふ積り。

蹴球部に關しては、君の所へも種々話はある事と思ふ。七月上旬練習が済んで、休暇迄續々と皆がやつて來た。御承知の今度の問題は僕としては實に淋しい氣がした。此の間新宿に行つて皆に一寸會つた時も、僕等の時とは隨分變つてしまつてゐるのに一驚した。何も變る事をとや角云はぬけれど、僕から見れば了解出來ぬ事も多い。一日の議論より一の實行だから一緒に小平に行つて練習を見てやり度いとさへ思つたが、其も出來ない。只充分の戰果を擧げる事も祈り、又期待するのみだ。十月九日には對帝大戰があるから、是非觀戦したいと思つて居る。

八月二十五上京。九月三日歸着。其の間に海水浴も終りになり、又當地は一漁村に歸つて了つた。氣候も九月に入つてすっかり涼しく、働く人達もさぞ、嬉しい事だらうと想像する。既に一年近く休んで、其の間に世の中も會社、何も彼も、急速度で移り變つて行く様だ。纏つて本も讀めない。深く考へた事もない様だ。取残された淋しさを感じる。

先は近況御知らせまで。

長瀬凱昭
敬具

淺枝彦太郎様

蹴球には眞理がある。蹴球を經驗する者は凡て此の眞理を把握し得る者、追求する者であるとは云はない。眞理を得し得る、把握し得る蹴球を作り上げる事は難事中の難事である。

昭和十二年十月二十一日、突として吾等の長瀬逝く。彼は此の眞理ある蹴球を創り上げた。此の眞理ある蹴球を再び創り上げる者は誰ぞ。（十三、一、九）

話の泉

合宿だより（作者不詳）

一

彼奴が喰ふなら、僕も喰ふ
見てろ今度の晝飯に
オハチを三つ平げて
見事肥つて見せるから

自慢じやないが、見せたいね。

二

拜啓御無沙汰しましたが
僕も益々食つてます
合宿以來今日迄の

（中略）

追悼文

森田昭之

十月二十一日長瀬さんはなくなられた。此の報せを聞いた時にはす眼を凝つた。まさかなくなられる程の御容態とは卒業して最後に東京でお目にかゝつた時思はなかつたものを、最後にお目にかゝつた時話振り等一語々々力強く、唯少し瘦せて居られるとは思つたがあの時は心中ひそかに此なら大丈夫だと思つたけれど、今から考へると、あれは唯烈々たる精神力、激しい意志力に寧ろ眩惑されてゐたと云はうか。

幽明、界を異にした今は、最早懐しい兄の聲も聞かれず、姿も見られぬ。商大蹴球部とナガセ。長瀬さんと商大蹴球部、六年間石神井の豫科グランド、名古屋の合宿、商船との最後の試合にも敗れ、四部に陥落、さうくあの時は長瀬さんが病を押して應援に來て試合が終つて四部に落ちた事が分つた時はいきなり球を東高の武道場の壁に蹴りつけた事を。

それから蹴球部は前進した。長瀬を先頭にして四部から一部迄。頭の中をその一場面々々が、隅迄はつきりと通つて行く。併し此等の蹴球部に於ける長瀬兄の思ひ出は餘りにも多過ぎるし外に未だ幾らでも僕より適當な人が書くだらうと思ふ。

長瀬さんはあらゆる社會に於てリーダーたるべき人であつた。リーダーたるには烈々たる意志の力と、一段高所に立つて社會状勢を洞察し、あらゆる人間を包容する度量が必要だ。長瀬兄は此を持つて居た。人間は多いがリーダーは少ない。勿論坑

夫も技師も鑑山には必要だが、その鑑山の將來は技師長が決定する。我々は蹴球部の一先輩長瀬を失つたと云ふより、此の貧乏國日本が將、來更に困難な道を進むべき日本が、一人のリーダー級の人物を失つた事を悲む。

十月二十九日 於三池。

話の泉

× ×

清水睦君が新らしい靴を拝へました。赤い靴です。又赤いのが一つ殖えたとか。

× ×

金井君は洗濯好き。清水君のシャツを洗つてマント颯爽！ 金井君相變らず汚いのを着てションボリ、某「これからシヤツは金井の隣りに掛けとこう」金井腐るまいことか。

× ×

近頃出來た部員の綽名を紹介致しますと、

池尾君には「(巨人)ゴーレム」

藤塚君には「ゴリラのポンチヤン」仲々よく以て居ます。又豫一の清水君には「蒋介石」これには當人、一寸腐つて居ます。

長瀬兄追悼譜

田 島 輝 重

深夜突如として、「電報！」の聲……

ナガセ、アニ、ケサ、トツゼン、ユク……何度讀んで電文に變りはない。一體之は何の意味だらうか、あの長瀬さんなら腰越で元氣な姿を見た許りだ。神宮で泣いた姿を見た許りだ。二階堂さんを見送つたといふではないか。

死ぬ譯はない。何かの間違ひだ。僕は單純に而も決定的に長瀬さんの全癒の日近きを信じて疑はなかつた丈に長瀬死すといふ事は此の電文からは読み取れなかつた。

あの日焼けした元氣な長瀬さん。昔日の姿は間も無く我々の前に再現するのだ。死ぬなんて馬鹿げた事は断じてあり得ないさあ譯がわからぬ。すると、ナガセアニとは、長瀬さんの兄さんの事かな。それに違ひあるまい。だが兄さんは大阪で元氣に活躍してる筈だ。ふむするとこのユクといふのは出征の事かな、二階堂さんの出征したのも未だに夢の様なに又出征とは大變だなあ、それにしても餘り突然だなあ、今度の事變許りはどうも見當のつかない召集をやるわいと至極御芽出度く考へててまつた。……だがそれにしても……混亂したねぼけた頭の中で迷想がクルクル輪を描いて睡魔の仕業かとんでもない結論を夢みてしまつた。

夜は明けて冷かな大氣の中で顔を洗ひ部屋に戻つて机の上の電報を見て驚いた。ナガセアニケサトツゼンニユクツノグとある。

之はどうも胸さわぎのする事だ。單純な昨夜の考へは餘りにもうがちすぎる。

或日、萬が一にも東作さんが逝つたのかもしけぬぞ、さあ荒井に聞いて見なければ、慌てゝ會社へ出かける。

荒井は未だ會社に出てないかしら　まゝよと荒井と角田に兩天かけてイラ立つ胸をおさへて待つ事しばし、リリン、「何處」「銀座」荒井の聲する。

何！　何だつて長瀬さんが死んだのだつて、あゝ杞憂は事實となつてしまつた、想像もつかない、夢想だもしなかつた。

餘りの事に茫然自失、放心した虚な眼が硬直した身體から飛び出てゆくやうだ。

「オイ君どうしたんだ」主任の聲も入らばこそ、長瀬さんが敬愛する長瀬さんが死んだのだ。死んではならぬ人が死んだのだ、あゝ何故長瀬さんは死んだのかしら、言ひたい事は山程ある聞きたい事も山程ある。どうにも信じられない突然の死だ。長瀬兄なくしては何としても大きな支柱を失つた塔の様に僕の精神は根柢から動搖の渦にまき込まれてしまつた。

洋傘片手に多摩川堤へ譯もなく飛び出す。

長瀬逝けりく。ちぎれ飛ぶ斷想の一つ一つ、そは全て樂しかりし昔時の想出である。雲雀の石神井だ、草茫茫々の國立だ、あゝ今更に懷しき、狭いながらも樂しい蹴球部播籃時代の想出だ。

吾々は如何に離れ住まうとも如何に異なる生活に身を投じやうとも、絶えず心の奥に流れる想出の蹴球部生活を通じて、就中、クローズアップされてくる長瀬兄を通じて一つの大きな心の糧を得てゐた。

叱られ、ばこわかつた。ほめられ、ばうれしかつた。笑へば笑ひ泣けばなく、命はこれ唯従ふ、偽りなき情い生活だつた。技も力も吾々の熱情と團結の前にはもうかつた。長瀬兄の與へる指導精神は決して高遠な理想を說いたものではない。むしろ手近かな實踐すべき事の強調であつた。あゝ長瀬兄こそ眞の意味での偉大なる政治家であつた。

辛かつた、苦しかつた、誰もが黙々と勵み進んだ。國立の富士見通りを、長瀬さんと肩をならべて殿りをつとめたマラソンの苦しさ。

あゝ全ては今となつては長瀬兄想出の源泉として美しく樂しき、しかもうら悲しきロマンティーカな夢の世界と化してしまつた。

長瀬を今失ふとは蹴球部の不幸之程大なるはない。蹴球部よ、汝の偉大なる戀人は逝つてしまつたのだ。

仰ぎ見れば雲片々西に急ぐあり、俯すれば多摩の流れ 玉石に和音す。雲水逝きて歸らず、兄又逝きて歸らず、悲情の秋風我に辛く我が心に唯々、夕暮と共に沈み行くのみ。

二

荒井、角田、と共に松本先輩を訪ひ長瀬宅に向ふ。吾々が如何に平靜を失つてたかは、三人が三人傘を残らず松本氏の事務所におき忘れた事でも解る。

西巣鴨長瀬邸にて、新しく涙をそゝるは今は亡き長瀬兄の寫真である。君は尙生けるが如く、温容額に溢れてしかも威あり

焼香の手もふるへつゝ君が寫真に對面す

長瀬さん、貴方は死なれた、我々、かくも心から子の如く、弟の如く追ひ慕ふ者を残して、長瀬さん貴方は本當に情の深い兄弟思ひの人だつた。亡兄の幕參の話はいはずがな、幼時に於ける亡兄に對する心やりの話、きいて涙なき能はざる程の人だつた。僕は（否他の人も皆さうだらうが）父母もなく兄もない、唯寂しさを蹴球部でまぎらはした。そして長瀬さんに甘へ、すねて見たかつたのだ。長瀬さんは僕の話は何でも聞いて呉れた。その長瀬さんが死んだのだ。泣け、悲め、思ひのまゝに、だが長瀬さん、貴方が永遠の戀人たる蹴球部は我々弟が遺志を受け継いで發展させます。我々は我々の心に長瀬さんを再生させ、球部に不滅の長瀬精神を守るであらう。

長瀬さん 貴方の死なれた事は事實だ。しかし蹴球部は決して貴方を失はない。

僕自身又辛い時苦しい時には貴方を想ひ、過去の夢を描いて、心を休め疲れをいやし、絶へず新しき力と新しき心を以て現實の生活に勇敢に戦つて行きます。

眠れ 長瀬兄よ やすらかに。

兄か永遠の戀人 商大蹴球部は我等遺志を享け繼ぎて必らずや正しき發展の軌道を進ませるであらう。

蹴球部の美しき營みの中にこそ、長瀬は永久に生命あり。我々各自の絶えざる精進にこそ長瀬精神は發揮される。あゝ長瀬は逝きぬ、やすらかに。

今はたゞ何をか恨まん悲しまん。ひたすらに、君が後生樂祈るのみ。

あゝ長瀬は生きり永遠に、君が名は、商大の蹴球部員の誇なり、精神でもあり生命なり。

幾年か親しく教へを享けし我、君が情に幾度か迷へる羊も救はれぬ、光を得たり、生を得ぬ。

今ぞ我嫌前三尺ぬかづきて往時想ひて唯涙、

眠れ長瀬よ、永久に我は誓はん、不^レの精進。

突然の事に駭然心亂れて筆又進まず、唯敬愛する大長瀬東作兄の御靈安かれと敢へて拙文を靈前に捧ぐ。

話の泉

狩さん行進曲　（合宿にて　よみ入しらす）
食つて来るぞと勇ましく
誓つて室を出たからは
八杯九杯でやめられよか
食事の合圖きく度に
まぶたに浮ぶ飯の山

春の合宿には色々な事があつたが、その中の傑作はなん

といつても國立音樂學校の出來事。例年の通り箱根士池迄
エツサノ駆けてゆくと、音樂學校の大が突然吠え立てる。
餘り度々あるので、物好きな奴が調べてみると、なんと吾
々の中に清水君が居つたからと見事疑問が解決した。

春の合宿は國立で和氣藪々のうちに行はれた。驛頭の鳥
の飼育してある所に近頃鶴が居なくなつた。口の悪いのが
「二階堂さんか、ハクツルにして飲んじまつたのだよ」に流
石の國立の猛者も唯爆笑。

或日、學部一年の清水君、すつかり消耗して部室にやつ
て來た。原因を訊くと、昨日食つたカニにやられて腹を悪
くしてゐるとの事だ。當人嘆じて曰く、

「こんな所で仇討にあふとは思はなかつたよ」と。

サルカニ合戦は昭和の時代にもある。歴史は繰り返すか。

追悼文

大掛隆久

長瀬さんが亡くなられて再び秋がめぐつて來ようとして居る。昨年の夏の合宿を新宿驛頭で御元氣で御見送下さつた御姿を
想ひ其の後も段々御元氣になつて行かれた御様子を忍ぶにつけ突然の御他界は全く信せられない事だつた。

今にして猶長瀬さんが全々別な世界に行つてしまはれたと云ふ氣持にはどうしても成り得ない。夫は長瀬さんが學校を卒業
されてから直ちに遠く九州に赴任され年に一度位しか御目に掛る機會が無かつた事にもよるのかも知れないが吾々の心底に
焼きついて居る長瀬さんが餘りにも偉大である爲であらうと思ふ。

學校御卒業後の長瀬さんは自分には神人化されて居たと云つて過言でない。其の氣持は現在更に強いものがある。

實際吾々の學生生活の大部分を占めて居たと云へる蹴球部生活に於てどんなに長瀬さんの御厄介になつた事か。

蹴球部を想ひ長瀬さんを忍べば想ひ出は縷々として盡きない。

長瀬さんが乾坤一擲斷手として部の更生を計られた想ひ出の地石神井は長瀬さんの心にも深く刻まれて居た事であらう。遠
い國立から午後二時と云へば雨の日もいとはず缺かさずやつて來た角帽は長瀬さん一人だつた。部室の直ぐ隣りの習字の教室
で半峰さんの授業を受けて居るとあの人ななつっこい顔が早く出てこいよと云はんばかりにのぞき込むと、もう習字もくそも

無い。きはどい隙を見付けて教室を飛ば出した事も懐しい想ひ出だ。

遇々長瀬さんが練習に遅れて來た事があつた。長瀬さんは必ず練習に出て來るものと決めて捕つて居た吾々は駄々をこねて練習をやらないと云ひ出してひどく叱られた事がある。優しさの反面、事根本に觸れると非常に峻烈さがあつた。グランド上の長瀬さんを畏敬した所にも茲に存する。

長瀬さんと一緒にボールを蹴る事自身が張切りの動力だつた。火の玉の様な御氣魄に接すると無意識の中に疲れは消し飛んでしまつた。練習後の部室の和やかな空氣、愉快に遊んだ楽しさ、試合の後で新宿の白十字に集つて相互のプレイを批判し合ひ勘し合つた事共忘れ得ぬ想ひ出である。スポーツの根本は團體精神の涵養にある事を洞察する事は難しい事ではない。然しが夫を着々と實踐に移して行かれた處に長瀬さんの偉大さがしのばれる。

元來頑健でなかつた長瀬さんが夏の合宿練習に毎日家から通はれて一緒に練習された御苦勞は察するに餘りがある。練習が終つて箱根土地のグランドから遠い富士見通りを一橋館迄走るのは仲々樂ではなかつた。當時は未だ餘り丈夫でなかつた自分は兎角皆に遅れ勝ちで良く長瀬さんと一緒に取り残されたものだ。元氣な連中が競り合ひ乍ら彼方先を走つて居るのを見乍ら歩く様な速さでザク／＼と小砂利を踏みつゝ夕日の名残を止めてゐる美しい夕暮の中を走つて歸つたあの満ち充りた氣持は實に尊いものだと思つて居る。

秋のリーグ戦は一勝毎に纏りを強めて行つた。勝つて張切り、張切つて勝ち遂に四部に優勝した。シーズン・オフの祝勝會で小さい乍ら優勝盃を中ににして涙を流して喜ばれた長瀬さんの顔は未だに忘れない。

勝つて奢らず長瀬さんの許に一丸となつて精進した結果當シーズン直ぐに三部で優勝し二部に昇進した。強敵慈大を降して弱敵一つを残し兎角緩まんとする部員の心を案じてグランドの一隅に部員を集めて『昔或る處に木登の名人が居た……』と例を引き乍ら懇々と心の馳緩をいましめられた。茲にも長瀬さんの面目躍始たるものがある。斷乎たる行動の裏に慎重、細心の準備があつてこそ蹴球部再興が達成せられたのだ。掬して盡きざる教訓を味はふ。其の年の高商大會に豫科員の心の緩みから専門部に敗れた時、之は俺の責任だと云つて大好きな密措を断たれた事を後になつて知つて感激した。

二部昇進を達成して學窓を去られた長瀬さんの得意や思ふ可しである。長瀬さんが卒業されるのは實際淋しい事だつた。『長瀬さん一年落第しろよ』と荒井さんが云つた心は全部員の心だつた。長瀬さんにも部を去る事は名残惜しい事であつたに違ひない。卒業式の前日、想ひ出の石神井グランドに唯一人立たれて名残を惜しまれた由である。

然し長瀬さんにとっては蹴球部生活は人生の序論であつたに違ひない。偉大な人格と明晰な頭腦と豊富な経験によつて基礎付けられた確乎たる信念とをもつて實社會に乗り出して行かれた。三菱鑛業若松友店での御活躍の模様は傳へ聞くだに後輩の血を湧かさずには置かなかつた。

恨みて由無き事乍ら壯途半ばにして病を得られた事は長瀬さんにとっても如何に殘念であつた事であらう。今夏社用にて長崎へ出張の途中、九州若松の近くを過ぎ煤煙もう／＼たる空を仰ぎ見て、あゝ長瀬さんは茲で病に斃れる迄頑張られたのかと無限の感慨にふけた。

強い精神力は病氣を殆んど恢復に迄導いた。全快近しとの知らせに吾々はどんなに喜んだ事か。去年の夏休頃には部員が入れ代り立ち代り 別邸に伺つた。御見舞に行くのか御話を伺ひに行くのか分らぬと云つた具合で、御迷惑であつたかも知れない。然し長瀬さんの御話を伺ふ事は全く嬉しい事だつた。

あの變らぬ明朗な笑ム聲、諄々と眞理を說かれる時あの眼、あの口、あの手、今だにはつきりと思ひ出す。

嗚呼然し長瀬さんは亡くなられたのだ。悲しむに言葉を知らない。

刻下の非常時局を思ふにつけても長瀬さんを失つた事は國家にとつて惜しみて餘りある事である。然し長瀬さんの精神は多かれ少なかれ吾々部員の胸の中に生きてゐると思ふ。之を自ら磨きつゝ蹴球部を理想の蹴球部に導き、實社會に出でては長瀬さんの遺志を繼いで國家に御奉公する事こそ御恩に報ひ且つ又莫體を慰め奉る唯一の道であると信ずる。

話の泉

堀尾君、本科に入つてから頗に、あの女性的な心臓がお

強くおなり遊ばして、目下蹴球部の一つの驚異です。

或日、それはとても寒い日でした。下駄履きに足袋といふ物凄いイデタチで練習にお出ましになると、他の部員か

ら口やかましくからかはれる。

某「實際、堀尾さん足袋とは凄えな」

堀尾「そんな事はタビノ、聞いたよ」

「本科生ともなつたら身なりも少し考へろ。このタビは勘辨やがて寛平さん、

「やがてやる。」

追憶

村井恒典

車の外は暗い。窓硝子に反対側の座席の影がうつるだけである。時々踏切の燈火がバツと四邊を明るくする、夜の中央線の電車の中である。明大に負けて僕の心も外の闇と同様に暗い。今後の試合を考へる時のミバツと明くなる。氣持は沈む一方で泣き出したい様な何か大きなものに思ひ切り甘へて見たい様な氣がする。

長瀬さん。こんな様に自分でどうしてよいか分らない時に長瀬さんにお會してあの自信に満ちたお話を聞きたい。だがその長瀬さんも今やない。石神井時代に練習を終へて歸りの武藏野線で座席を分捕つて一緒に歸つた時、池袋で一寸降りてコーヒーを飲みに行つた時、又はお宅で遅くまで麻雀に打興じた時等を次々に思ひ出す。

拓大に引分けをしてた時もこんなどつた。だが僕は若かつた。今の悲しみ程も味はへなかつた。寧ろ悲しさよりも辛さと云つた様な氣持ちだつた。あの時の長瀬さんの氣持ちと今の僕の氣持ち、いや／＼あの當時の方がもつとともに悲しさは深かつたかも知れない。僕等の今の苦しみは木だ／＼足りないかも知れない。だがとても苦しい。

蹴球と戀愛をした人。蹴球に全生活を打込んだ人。我々の部に外の生活は多過ぎる様だ。もつと一筋に部の生活に飛込めなければ駄目だ。長瀬さん。貴君は亡くなられた。だが蹴球部には我々の心には未だあなたは生きてゐる。

我々に残された數回の僅かな蹴球生活。之を長瀬さんの爲に即ち蹴球部の爲に出来るだけ頑張る事を誓ふ。蹴球部の爲に頑張る事はとりもなほさず長瀬さんのこの世に残された唯一のものを守り育てる事になるのだから。十二、十一、九、愈々之で試験が終つた。短い六年間だつた。友人は皆一應社會を一見したような顔をしてゐる。生憎俺は何も知らない、何んでも知つてゐる風をしたいが皆は何も知らぬと云ふ。何となく子供扱ひにされた様な氣がする、が其で良いのだ、之から飛込んで行く未知の世界に對する憧れが。

新しい會社に入つてその會社を好きにならう。僕は環境が好になる事を覚えた。新しい會社の仕事に全身で飛込む、蹴球を熱愛した如く會社の仕事を熱愛しよう。長瀬さんは會社の仕事と戀愛された。僕はそこまで行かれたら幸福だと思ふ。

商大蹴球部にO、B、の集りのない事は物足りない事だつたと思ふ。よくこんな事を云はれた。「今一度母校の蹴球部の監督をしたら強い部にするがなあ」と云はれた事がある。確か腰越だつた。「今からでも遅くない。どうぞ。」と答へた。「馬鹿俺にはもつと大きな仕事があるよ。」と言はれた。若い人はこの言葉を誤解してはいかん。長瀬さんを知る者で又蹴球部の一員としてこの言葉を誤解するのは故人となられた先輩に相濟まないぞ。

だが俺はO、B、の集りを作るべく努力する。之又東作大兄の遺志をつぐ事になると信ずる。

長瀬さんは僕に最も大きな感化を與へて呉れた人の一人である。十三、二、廿五、

長瀬さんの憶ひ出

本三後藤虎雄

「長瀬さん」と言ふ言葉を耳にしだだけで自分は心に衝動を受ける。自分の現在の蹴球部生活が恥づかしからぬものであるかどうかの反省が瞬間に促されるのである。本當に蹴球部生活を生きてゐると信じて氣持の昂揚してゐるときには長瀬さんの笑顔は親しみに溢れて自分を見てゐて下さる様に思へる。その時は本當に嬉しいと思ふ。その反対に、自分の現在の生活が浮ついてしまつて、惰性に流れてゐると意識するときには、恥づかしいと云ふ反省が働いて長瀬さんの御顔を正視出来ない気持ちになる。

かうして、長瀬さんは今でも自分達と一緒に、グランドに部室に更に蹴球部に生きてゐて下さるのだ。

昨シーズンのリーグ戦に於ても、長瀬さんを憶ふことに依つて我々はどんなに鼓舞されたことだらう。へばつて来て身體が動かなくなつて來た時、「何糞負けるものか」と云ふファイティングスピリットが、長瀬さんを憶ひ浮べることに依つて、全身に溢れて來たことを今ではつきり記憶してゐる。それは、蹴球部員の心の中に、強く生きてゐる長瀬さんの御力だと信じてゐる。

學校を卒業されてからの長瀬さんは、數へる程しかお會ひしてゐないが。お目にかかる度毎に何時も變らぬ御元氣さに、部員一同鼓舞激勵される氣持だつた。我々が豫科二三年の頃長瀬さんはお勤め先よりの年に一度の休暇も必ず夏の合宿中に選ばれ、遙々九州から上京されてお忙しい間にも國立の一橋館に顔を見せて下つたものだつた。合宿の夜を久しう振りの部員との談笑に過されるとき、本當に故郷に歸つた様な和やかな感じを楽しんで居られた。

丁度その頃、小平の豫科のグランドが完成されたので長瀬さんにも見て頂く積りで、國立から出掛けて練習した事があつたが、その時の事が今でも深く印象に残つてゐる。

久し振りに長瀬さんと一緒にボールを蹴る喜びに部員一同張切つて練習を勵んだが、多少和氣藪々の氣分が過ぎたかも知れなかつた。

ランニングバスの時だつた。練習を見て居られた長瀬さんが、笑然、

「もつと走れ！ そんなことで敵が抜けるか！」と大聲で叱咤された。長瀬さん獨特の大きな聲がグラウンド一杯に、部員全部の耳に、痛烈に響き渡つた。練習をしてゐた我々は思はずハッと緊張した。確に我々は走つてゐなかつた。走つてゐたかも知れないが、單にボールを追つてゐたに過ぎなかつたのだ、敵の防禦を突破つてゴールに飛込むと云ふ氣魄恐らく何所にも見られなかつたに違ひない。リーグ戦を控へての合宿練習が、惰性に流れてもたことを、長瀬さんはどんな氣で見て居られたであらう。

我々は非常に恥かしかつた。濟まないとと思つた。同時に忘れかけてゐた激しいものを振ひ起した氣持だつた。

久し振りに部員の前に現れた長瀬さんは、昔のまゝの「意氣と熱」の長瀬さんだつた。商大蹴球部の長瀬さんだつた。叱ら

れた我々は後悔し奮起すると同時に、長瀬さんの相變らぬ熱情を涙の出る程嬉しく思つた。

此の時の長瀬さんの姿、聲、そしてグランドに溢れた意氣、是等の情景は當時の部員にとつて忘れる出来ない強い印象として残つてゐる通じであつた。

×

×

長瀬さんは強い激しい性格の方だつた。而もその強さは、意志の強さ、理性の強さだつた。

又反面には、非常にやさしい、思ひやりの深い暖かな氣持を持つて居られた。部員の一人二人に對して、常に大きな愛と正しい理解とを以て臨まれた。それは『蹴球部は意氣と熱のるつぼである。而して又愛に充ちた境地である』と云ふ平生の御言葉に理れてゐる通りであつた。

例へば、一つの試合後には、その試合に於ける各人のプレイを批評されるのであるが、その批評は、あく迄、理智的な厳正さを以つて貫かれて居り、同時に、その時の凡ゆるコンディイションを斟酌して爲されたものであつた。注意が個人的に迄、亘つても、それが大きな愛の立場から爲されるために、言葉のきびしさは、却つて暖かく響き我々の心からの奮勵を、一層の努力を促しめるのが常であつた。

×

×

卒業後頂いたお便りの一節に

「凡そ蹴球部は個人の我を捨て、皆一致協力して試合に勝ち、母校の名譽をあげねばならないが、又一方個人の發展を期さねばならない」と云ふ御言葉があるが是は充分味ふべき御言葉だらうと思ふ。

自分は是を『蹴球部の向上と個人の發展とが相關關係にある』と云ふ意味に解釋し度い。即ち、我々が蹴球部の向上のためには、誠意的な努力とをする事が我々自身を發展せしめ、又、我々自身が絶えざる精進に依づて、より大きく成長して行くことが蹴球部を更に一層の進歩と充實とに到達せしめるであらうと云ふ事實を明確に認識すべきであらうと思ふのである。長瀬さんは、此のことを身を以て我々に示して下つたものと信じである。

最近の蹴球部が、著しく文化的な雰囲氣を濃くしようと努めてゐる傾向は、此の意味から言つて歓迎すべき現象であると思ふ。

× ×

長瀬さんの一周年忌をお迎へして、吾々蹴球部員は心からその御冥福をお祈り申上げると同時に『蹴球部は我が心のふるさと』と言はれた長瀬さんの御心持を忘れてはならないと思ふ。

更に又、商大蹴球部を今日あらしめた御精神と御力を、將來の蹴球部に永久に生かすべく、努力することを、つゝしんで御靈前にお誓ひ申上げようではないか。

(完)

六 兄 を 送 る

本科三年 後 藤 虎 雄

蹴球部は今春、六人の先輩を送り出さねばならなかつた。

此の六兄が我々部員にとつて如何に大きな存在であつたことか。六兄の姿を部室にグラウンドに見出しえない我々の淋しさたよりなさの如何に深かつたことか。更に又、六兄が六年間に亘つて蹴球部に印された足跡が如何に大きなものであつたことか。こゝに今更喋々する迄もないことである。

或は良きプレイヤーとして、或は良きマネヂャーとして、或は又、良きサブとして、グラウンドに於て我々を導き激励して下さつた六兄は、他面に於ては、兄の如き相談相手でもあり、友人の如く樂しき遊び相手でもあつた。此の兄でもあり友でもあつた六兄を金ボタンの制服から、眞紅のユニフォームから見失つてしまふことは、我々にとつて非常な淋しさである。

石神井時代の狭く汚い部室と草だらけのグラウンドで初めて部員として接してより五年の長い間、我々は蹴球部生活の楽しさ、苦しさを共に味はつて來たのだつた。

眼を閉ぢて思ひ出して見ると、頭の中に胸の底にとりとめもなく後からくと湧き出して來る憶ひ出のなつかしさ。それは

六兄と共に過した蹴球部生活への限り無きなつかしさだ。

毎春先輩を送り出しつゝ、何時の間にか最上級生になつてしまつた氣持は、先の人の尻について、一段々々と梯子を上つて行き、先の人が登り切つた後、始めて一番上から見下した時よりなさに似てる。

六兄を送り出した後の淋しさ、又なつかしさは、我々の心を感傷的にさへする。

然し、六兄達との絆は斷ち切られた譯ではない。吾々には蹴球部がある。六兄達が、その強い力で大きな足跡を印された蹴球部がある。

『蹴球部は、我が心のふるさと』と言はれた長瀬さん様に、先輩達はどんな所からも、そして何時も、故郷を思ひ出してゐ下さる。又その限り無き發展を祈つて下さる。

我々は先輩達の示された道を歩みつゝ『故郷』の向上のために、一日又一日と精一杯の努力を重ねて行く。こゝに『故郷』を同うする我々と先輩との間の絶えざる繋がりがある。

今や六兄は、なつかしき『故郷』を出でゝ社會のそれゝの方面に活躍して居られる。蹴球部に印された力強い足跡を實社會に於ても示されるべく頑張つて居られる。

我々は六兄の後姿を、感謝と追慕の熱情を以つて見送り、又その前途への輝しき出發を祝福すると同時に、先輩諸兄の『故郷』を我々の『故郷』を永久に『意氣と熱のるつぼ』であり、『愛に充ちた境地』であらしむべく渾身の努力を續けて行くことを誓はう。

六兄を送りて

本二池尾隆二

毎年感じられることであるが、今年も又六兄を送り出した後の春の合宿には此の人達を失つた淋しさを感じずには居られない。此處には大きな空隙が残つてしまつた様にも感じた。

鈴木兄、村井兄の長身はそれだけでも、小粒の多い商大の蹴球部に何とはなしに頼母しさを與へて居たし、大掛兄の小粒の軀から蹴り出すボールの銳さは又小氣味よいものだった。

鈴木さんはあの氣の強さの一面又何とも言へぬやさしさを持つてゐた。強けれども亦情に脆い兄の性格は接する者をして偉大な人間味を感じさせる。

大掛さんのあのむしろ蒼白な顔からは、常に眞剣な何物かを感じさせられた。

春の合宿の打合はせに本科の部室に僕等が集つた時、一人隅の方でジッパーと皆の話を聞いて居られた時の兄を思ひ出す。最後まで部を見守つて居られた兄の姿には頭の下る様な思ひがする。

村井さんは誰とでも打ち融けて話をする氣易さを持つて居られた。ロングキックの時に出すあの弾丸の様なボールにはむしろ超人的なものを感じた。

林田、重見、淺田の三兄に對しては色々の御家庭の事情のもとで最後まで蹴球をやられたあの態度に敬服する。

笛の一吹きに心のすべてを、無言の中にこめて居られた重見さんの姿をいつも思ひ出す。

今や六兄を社會に送り出した吾々は、たゞ徒らに残された空間ばかりを見つめて歎息しては居られない。

一人一人が此の六人の人達の分だけ、いやそれ以上大きくなつて、此の空隙を埋めるよう努力しなくてはならない。

二部轉落の責任の全てを負つて卒業して行かれた六兄よ、兄等の胸の中を想ふと又感慨無量のものがある。

すべては運命であつた。運命には抗ひ得ない。あとに殘つ

た吾々の行き方も只一つである。此の只一つの道に向つて部員の四十餘名が、ガツチリ腕を組んで歩まねばならない。秋の成績こそ全責任を負つて卒業して行かれた六兄の吾々のお詫びでもあらう。(昭和十三年五月四日記)

六兄を送る

本二菅瀬十朗

卒業すれば社會に出る。蹴球部を去る。之は實泣いてもわめいても仕方がない。卒業をされる方にとつては長年の學業報いられて、實社會へ第一歩を踏み出されるのでありますから、實に祝福すべき、おめでたい事であります。我々にとつては今までの好き指導者を失ふ事であり、船の舵を失へる如く悲しむべき事であります。然しかくの如き事は客觀的に考へるべき事ではなく、主觀的に考へるべきであつて、六兄が功成り、名遂げて實社會に巢立たれた事は眞に喜ぶべき事であると云はねばなりません。而して六兄の我々に與へて

つては居りませぬ。一步退けば二歩、三歩前進を續ける意氣を以て進む積りで居ります。

私は今年卒業せられた六兄には並々ならぬお世話になつて居ります。我々が一年に入學した時、大掛兄からは何も出来ない私達をキツクの初步がら教へて戴きました。又村井さんとの所謂漫才なるものも、笑ひの中に、私達に色々教はるべきものを含んで居ました。今年のグラウドに於ける練習で第一に感ずる事は、ロング・キツクで大掛兄、村井兄のあの物凄いキツクが見られない事でした。又大掛兄のキツク、アンド、ラツシユの實績を身を以つて示して戴いたのは、私には非常に貴い教訓ともなりました。又鈴木さんの強氣、度胸、皆或々にとつては模範となつて居たのであります。

鈴木兄は今遠く朝鮮に居られ、又林田兄、淺田兄も遠く内地を離れて居られますので簡単にはお會出來ぬのが残念です。村井兄、大掛兄、重見兄は東京に居られますので、お目に掛かる機會はありますが、それでも實社會の人となればては今迄の様なわけには行かず、それに村井兄、大掛兄はやがて入營されるので、益々お目に掛る機會は少くなるわけで

下さつた御恩の一でも報いるべく努力すべきであります。終りに六兄の健康に注意されて、大いに活躍されん事をお祈りしてやみません。

送別文

本一石割知之

毎年の事ではあるが、今年は又六人といふ多數の先輩を送り出した。二部陥落の責を全部負ふて卒業された六兄の感慨や如何ばかりのものであらうか察するに餘りあるものです。四部陥落の時に商大に入學され、こつゝと他の先輩と、蹴球部建設に精進され、一部迄全く意氣と熱を以て幾多の苦難を切り抜け、引き上げて戴きましたが、此の並々ならぬ苦心をされて來られた方々を、我々は此の蹴球部から、花々ばしい成績を挙げて、それをお贈り致すべきであります。不幸にして、我々の下級の者の努力の至らぬ爲、陥落の憂目を見た事であります。然し蹴球部は何時迄も其の様な事にこだは

す。然し、寸暇を割いて、或は練習に、或は試合に來て私達を勵まして戴いて、誠に感謝に堪へません。

此の後は、秋のリーグ戦、二部優勝を目指し、第一戦千葉醫大を皮切として、我等三十有餘名が一緒になつて、當つて六兄に對するせめてもの御恩に報ひたいと思ひます。此の上は諸兄の御健康に注意されて、實社會に充分の御活躍せられん事を祈ります。



無

題

村 井 恒 典

部誌原稿ノ切近附く、何か書かうゝと思ひつゝ日はどんどん過ぎてゐる。學校に居た時は原稿位一寸書けぬ事は有るまい
なんて云つて居たが無理もないと思ふ。そこへ行くと川村さんは偉い。諸君は石割に見せて貰つた事と思ふが、あの蹴鞠の記
録は仲々大變なものだ。

此度別記の様に西松會なるものを作つた。之は從來とも作らう／＼と云つてゐたものであつてとかく先輩が名のみに止り之
ではお互に淋からうと云ふのでこしらへたのである。故長瀬東作さんの遺志でも有り僕の知る範囲で總ての先輩の希望であり
事實昨年頃から荒井君がやつて居た事である。

扱て會則を作るの何かとあらたまつてからやゝへこたれた。思ふ様な趣旨が仲々簡條書の會則の中に入らない。松本さんの
事務所でどうやらかうやらでつちあげた。會の名は川村さんの骨をけずられたものだ。

追々西松會をしつかりしたものにして行くつもりだ。仲々筆がとれないでの會務の方も滞滯してゐる。

朝起きて飯を喰つて電車の中で新聞を讀んで會社で仕事をして時間が來て歸途につく。途中寄道をする當でもなく、あつても
金がなく、へへへ。家へ歸ればすぐ晩食を食べてフーツとなつてしまふ。だが仲々面白い。何もがらぬから面白いのかも知
れぬ。

會社を一日休んで徵兵検査を受けに行く。六時迄に集れと云ふので四時半に起きる。電車の中は數人しか居ない。驚く勿れ
それが皆検査を受ける壯丁だ。最初は教室で學科だ。が考へて呉れ、検査場は小學校ですぜ、かるが故に椅子も机も子供のそ
れだ。僕だつて昔は小學校に通つて居た事があるんだが今の僕があの密柑箱みたいなものに腰かけられるかつてんだ。やつと
尻を椅子にのせるとひざが机の上に出る。やむを得ず机を前に押やると前の人に入る空間がなくなる。机に腰かけてもまだ少
ないと云ふのに。そしてソロバンでも持たして見ろ、涙なしには見ておれんから。とにかく答案を出して、カンニングなんか
しないぞ。昔からそんな事はした事がない。體格検査はすら／＼進む。最後に徵兵司令官が、

「君ハ背が高イナ」「ハア人一倍高イデアリマス」

「足ガ長イノカ胴ガ長イノカ?」「勿論足ガ長イデアリマス」

「筋骨薄弱ト書イテアルガ」「ヤセテ見エテモ人一倍強イデアリマス」

「ソウカ人一倍強イカ。……」

……。(數分、ソレホドモナイ)

「村井恒典……第一乙種合格」「村井恒典第一乙種合格」

以上ハ最後の對話デアル。カクシテ俺ハ悲シクモ筋骨薄弱第一乙ニサレテシマツタ。涙モ出ネエ。

蹴球部モ仲々良イ新人ガ入ツタソウデスナ。シツカリヤツテ下サイ。

書

翰

大掛隆久

すつかり御無沙汰しました。

徴兵検査以後非常に忙しく、御目に掛らず當地へ参りました。早、五日になりますが毎日百度を越す工場内で油に塗れ乍ら實習にいそしんで居ります。鐵と油と塗料の匂ひが熱氣の中に充満して居る工場の中で終日身をけずり乍ら生産に從事して居る職工の苦しみは全く想像の外です。

只黙々として己の務を果しつつある姿は實に尊く、茲に日本産業の原動力有りとしみじみ感ぜられます。

外面的に見れば雇傭者と被雇傭者との對立は否定し得ぬかも知れませんが、仕事の輕重は何れとも云ひ難い筈ですね。自分の遂行しつつある仕事の眞意義を知り得るならば假令肉體的な苦痛は有らうとも生き甲斐の有る生活を爲しつつ國民的使命の達成が出来るのではないでせうか。そして比較的教養は少いが信じ易い職工を斯く導くのが指導者即ち雇傭者乃至は高級從業員の職務であり、之が實現せられてこそ、始めて労動協調も可能となると信じます。

經營の合理化、賃銀制度の研究等色々行はれて居る様ですが、若しポイントを外すせば有名無實ですね。

制度運用に俟つとか、結局職工一人一人の心構へ如何に縣つて居ると云ふ事は吾々が蹴球部に於て學び得た事より明確だと

思ひます。蹴球部でやつた事が役に立つとか、立たぬとか云ふ小事は免鬼角として、卒業して事毎に頭に浮ぶのは蹴球部です。當地へ参る途中片瀬を過ぎ、昨夏長瀬さんを御見舞した折の事を考へ涙が流れました。

一周忌も近付いては参りましたが、追悼號とする部誌は何うなつて居りますかが唯一の心懸りです。

當地には來月十日頃迄居る豫定です。

では又御便り致します。

何卒御自愛の程を。

亂筆多謝

七月二十一日

隆久 拜





隨筆・感想集

斷片

本三岩崎寛貞

今は亡き長瀬さんは常に云つてをられた。「蹴球と戀愛しろ」と。――

私は思ふ。――我々の蹴球は遊戯ではない。それは眞實に「敬虔」なるものとして把握し理解せねばならぬ。而してその理解は我々が蹴球に浸入する事に於て、蹴球が我々に包摶せられる事に於て、――感情移入と自己忘却と融合とに於て成

立する。換言すれば實に純粹愛の境地に成立するのである。

ゲーテの戀愛は宗教であり、「敬虔そのもの」であり、毫も官能の戯れでなかつたといふ。而してそれはゲーテ自身の、「本質」を伸張する動力となつた。我々が蹴球する態度もこれに匹敵するものでなければならぬと思ふ。人生を通してすべての方向に作用を及ぼす中心點であり、出發點である本質の形成と成長とに資することなき蹴球は我々の蹴球の墮落である。とまれ、我々は蹴球に浸入し、包摶せられねばならぬ。而して、それが「蹴球に戀愛しろ」と云はれた本源だと思ふ。

蹴球部の團結の意義

本二米山大三

人格的結合による社會を論する前に、そもそも人格とは何か、と云ふ問ひに答へねばならぬが、自分は唯人格の根本義はそれが超個人的な先驗的なものによつて統一されてゐる所にあると云ふに留めて置く。

凡そ二人以上の人間が團體として生活する場合、そこに社會なるものが成立する。社會なるものゝ分類は社會學上相當複雜な問題と思ふが、自分は此れを倫理的意義から見て、二大別し得ると思ふ。乃ち一つは利己を動機として結合せる社會であり、他の一つは人格的結合により成立する社會である。前者乃ち利己主義に基づく社會は、利害の一致せる間は矛盾も少く無事であるが、一度何らかの事情により利害相反するやうになれば忽ち離散せざるを得ない。昨日の友も今日の敵と云ふやうなこと、なる極めて賴み難い結合である。然しながら自分は今から重に論ぜんとするのは、我が商大球部がかくあるべしと信ずる後者乃ち人格的結合による社會に關してである。

しかば、人格的結合の社會は如何にして成立するのであらうか。その社會は如何なる人々によつて組織されて居るべきであらふか。かかる社會の成立に第一に、根本的に重大不可缺のことは、云ふ迄も無くその社會の各成員は、いと高きもの、清きもの、美しきもの、聖なるものに――神に、絶對に、眞理に、絶對最高の價値を與へ自己の一切をその追求に感激をもつて捧げ得る者――少くも捧げんと努力する者でなければならぬと云ふ事である。神か、絶對が、眞理が人間の魂の中に潜在すると云ふことから云へば、各人の心中に常住する眞理の追求に唯一最高の意義を見、そこに自分の生きる所以を、己れを欺ることなく感ずることの出來得るのでなければならぬ。かくする事を人間性の追求と呼び、又人格の陶冶とも云ふ。換言すれば、人格的結合の社會に、ける各人は、自己の人格の成長と發展とを以つて至上の價値となし、一切

のものをそれに關聯してのみ意義を見る人々でなければならぬ。乃ち此の社會の成員は何物にも屈從せず唯眞理の命する所に従ふ事の出來る人であり、又一切の障害を排して、自己の人格を完全に育て上げて行く事を最大の義務と感する人である。かくの如きことが人格的結合の社會の根本的前提である以上、我が蹴球部なる團體の各人も以上のやうな人格主義的立場を、己れを欺く事無く守り得る人、少くも守らんと努力する人々であると云ふことがその團結にとつて不可缺の前提であらう。

しかば、かくの如き自己の威嚴を自覺し尊重する人々は如何にして互に結合し得るか。此の事は最早餘り多くを云ふ必要も無いこと、思ふ。眞に人格の意義を自覺し、眞理の探究に己れの生くる所以を見出して居る人は他人に對して如何な態度を取るであらふか。云ふ迄も無く、彼は自分の求むる所を他人にも亦求むるであらう。乃ち彼は他人にも又自己の如く眞理に従ふやう要求するであらふ。此れを自分は愛或は人格的な愛と呼ぶ。それは自他を共に人格として完成せしめんとする愛でなければならぬ。擔言すれば人格の完成の爲に

共に苦しみ、共に惱まんとする愛こそ本當の人格的な愛である。更に又、至高者を求めて涯なき旅に上る途上、同じ目標に向つて涯なき旅を續ける友と合ふ時そこに深い親愛の情の生ずるのは當然であらう。此所に於て至高の價値に對する愛は、單にその友を除外する必要の無いのみならず、積極的にその友を必要とするに至る。乃ち、彼より高きものは彼を高めるために必要であり、彼と志を同じくするものは、その努力に於て協同するために彼にとつて必要となるのである。さうして更に、その敵を征服するためにもその友を多くすることが必要でもあらう。かくて人格的結合の社會は、至高の價値に對する愛を基礎として固く結ばれるのである。

以上極めて粗雑ながら人格的結合の社會についての考察を終へる。商大の蹴球部がよくまとまつて居る事をその最大の特色としてゐるが、此の事は正に我が部が人格的結合による團體である事を意味するものと自分は信じて居る。吾人にとつて部がよく團結して居ると云ふことが如何に重大な、又誇るべき事であるか、又反対に團結を失ふと云ふことが、如何に悲しむべき、又致命的なことであらうか。何となれば至高

の價値への愛は團結の根本的前提であり、此の前提に於て一致さへして居れば、お互に氣に入らぬとか、蟲がすかぬとか或は又まとまりを妨げるやうに見えるお互のあらゆる缺點も總て話せば分かることであり、團結にとつて第二次的なものとなるのであるが、若し此の前提に於て缺くる所があれば、

如何に長い間相共に生活し接觸してゐても絶対に眞の團結はなし得ず、又互に心の友となる事も絶対に出来まい。しかししながら、至高の價値に對する愛の熱烈さ、眞剣さに應じて、その團結の程度にも高低の生ずるのは當然であし、又至高の世界の永遠なる事も思へば、決して吾人は現在の部のまとまりを以つて満足しては居られぬ。我が商大蹴球部は完成せる社會に向つて永遠に涯なき途を歩まねばならぬ。

自分は我が商大蹴球部は、來るべき社會を暗示するものであり、此の部の出身者は、その身を以つて體得した部のかゝる團結の精神を、矛盾多き現世におし廣め實施して行くものたる事を信じて疑はぬ。

○一握の砂の中に宇宙を大觀し、ひとり野木に咲く名もなき草花を見て、美のこゝろを識るものには、蹴球部は小平の天つのである。——

この對象に、敢てわが田に水を引く氣持で、私はひとりござる。そしてその中には蹴球部と云ふ大きな對象が住んでゐる。

地に見出される「樂園」である。所謂「修養の道場」である。

○眞理は全體であり、而も個々なるものに宿る。個々なるものとして、蹴球部が持つ苦しみも、悩みも、先づ眞理の個々なるものに宿つた相であらう。その縮圖であらう。だから我々のグランドに於て経験する感情の純粹性は、詩人のうたふ悦びの境地に通ずる。哲學者が人間性の深き追究によつて到達する歡びに通する。

○個々なるものへの追考は、差當つて我々に與へられた仕事である。一つの問題の焦點を求むるべく、斷念餘儀なくされる事に於て、集中が可能とされねばならないと考へるのは、天才にあらざるものには許さるべき事である。否それは洵に人間らしき行き方である。

○蹴球部として「練習に毎日出て」一部全體を代表する主將に從ひ「精進の一路を辿る」人は、立派である。非人間的な人々を豫想するとき、その人は餘りにも人間的な人である。○蹴球部に席を置くといふ事は、蹴球部を肯定してゐる事である。それは否定を前提としても、迷つた儘に於ても、蹴球部を肯定してゐる姿である。

蹴球部を肯定するものは、部員としてのつとめを完うしなければならぬ。蹴球部員としてつとめを完する事は、蹴球部を愛する事にならねばならぬ。

この愛の契機を見出せなかつた人は不幸である。不幸を脱するには自らの精進が要る。それを拒んで、部員たらむと試みるとは、言語同断である。言語同断を許してゐる蹴球部には轉落を襲來する。破滅が忍んで寄つて来る。

しかし、一部から二部に轉落した事は、我々に一層深い材料を齎した。この材料に何か暗示が潜んでゐる筈である。

問題が複雑錯綜して來たら原理に還へるが可い。第一義に思ひ到るのが捷路である。蹴球部の四部に轉落した文献に我々は蹴球部の第一義を知り得る。部員は靜思して、これへの復歸が諸々の出發點である事を悟らねばならない。

思ひ出す事等

試験の前から合宿まで

菅瀬十朗

一、學校の歸りに大掛さんに會ふ。試験勉強がつらいつて云つたら、好き結果を求めて勉強するな出來るだけ努力してその結果はどうでもよい。然し努力したものはやり結果も好いとの事。これで安心頑張らう。

二、合宿、つらいたのしい、食ひたい、ねむい、風呂場の合唱麻雀、支那餃、エビキュールのコーヒー、音樂つかれた體をのんびりと椅子にもたせかけて、レコードを聞くのも好い氣持。斯くの如き合宿で何を得たか、上下の親しみ、團體生活苦痛をしのぶがままを殺す、こんなのは表面に現はれた事であつて、もつと奥深い何ものかあると確信する。實社會に出て自然に出てくるだらう。

三、春休に一番強く感じた事。

蹴球の爲又都會生活の雜然たる爲、容易に落付いていて自ら思索する時間も充分に持つ事の出來ない蹴球人には時折休などに田舎にあつて、比較的刺戟の少い生活に於て一人静かに書物を読み、自分の歩み來りし過し方を眺め、思ひ返し思ひ見直して考へるまとめる爲に考へた所を人に話したり、手紙に書いたり、ノートに書いてみる。何んと結構な事だらう人間は考へなければならぬ。深く思推しなくてはなくてはならぬ。考へる事により始めて人間らしい生活に入る事が出来る。人間をして世の中を歩むに力を與へ正々堂々明朗に然も全力をあげて生きる爲には全く考へねばならぬ。休に日頃出来ぬ東西古今の名著小説を讀む事等非常に好い。悠々自適の中に書に親しみ、思索する事、こんなに大事な事はない。學生の出來る唯一の特權、何事にも拘束される事なく自由に考へる。自分の生活の道と云ふか、生活の中心となるべきもの又基準となるべきものとして信念を持ち得てゐると云ふ事是最も重要な事である。之を落着いて自由に考へる事の出來る餘裕のある大學豫科六年間は實に他の専門學校に比して優れ點あります。どうせやるなら人並は不可だ一つ一つ大い

に意義あらしめたいと考へ、世の中に立つても多くの人々のリーダーとして立つ人として今日より何かの點に懸命になる事を心掛けたい。英雄主義にも一面眞理があると思ひます。

先輩先生先賢はどんく利用して名論卓説を拜聴して自己の蒙をひらくに寄からず、大いに當つて碎けねばなりません。

之は勇敢に遠慮を排して爲すべきであります。

四、自分を不幸な者だと考へ始めると實に不幸だ。自分が悲しくなる、反対に自分が不幸だと思ひ始めると實に幸福に思へるよろしく後者の如き考へになるべきだ。

五、人間つて自分の事をよく思はせる爲に友達の事を色々よく云つて、結局自分の事をほめてゐる事に気がつかない。

六、寝床の中で未來の事を色々空想し出すと後から考へが浮んでくる。未來の事を樂しく空想できる身分だけでも幸福と云はねばならぬ。明日の望もない人が如何に此の世の中には多いか。

七、ボールを蹴る事がほんとに好きになれば、ほんとの蹴球部員になれる。蹴球部と戀愛する。蹴球部なる鏡に自分をうつしてみる。そして自分を反省してみる。

と悪口をいふ奴がある。然し盲目になり不得ないで此なんに悲劇と鬭争に満ちてゐる世の中の方がどんなに悪口に價するか。盲目になつて絶對の信頼を捧げる時裏切りとか憎しみとかいふ事はなくなるであらう。一人残らず戀をしたら悲劇など起らないであらう。折節小才の廻つた疑ふ事の上手な人間が出て來るから、世の中の事はそれへと調和がとれなくなつてゆくのだ。團體生活に於てこの調和のとれぬ事は破壊である。もし又調和ある時この團體の力程恐ろしいものはない。

皇軍兵士は上官の命令に絶對の信頼と服従を誓ひ、調和を保つてその強さは世界に誇る事が出来る。兵士が一々命令を信用しなかつたらバラバラな軍隊が出來てしまふ。勝てる筈がない。盲信盲従なればこそ強いのだ。

盲信盲従は一面危険である。二・二六事件はそれをよく物語つてゐる。然しあれによつて兵士が「上官の命令は必ずしも正しくはない」などと考へ始めたら日本軍は弱くなるばかりだ。信頼と服従こそ團體生活者の心掛くべき事だ。

團體生活をすると種々自分の考と相反することも行動せねばならぬ時に出合ふが、その時こそ馬鹿になつて上の者

團體生活

本二狩森正雄

自分が何かやつて見たいと思つたら、必ず團體の一分子としてやらねばならないであらう。大きな理想は團體生活の中に於てのみ實現出来るのだ。各個人より團體は一步前にある。我々が公のために私を捨てるのも結局は其處に於て己が生きるからだ。己を殺して全體を活かし、全體が活きた事によつて、己が活きて全體の一として己の理想を達するに到るのだ。

では全體を活かすに何が大切であらうか。團體生活をする者は何を心掛くべきであらうか。之は私のみでなく凡ての人の考への事であらう。或映畫のシーンに戀する男が殺人の大罪を犯してゐる事を發見した時、その女が微笑しつ、「何んな事をしよう」と貴方のする事に間違はないと思ひます。私は貴方を信じます」と言ひはなつ所があつた。「戀は盲目」など

を信するのだ。その結果の悪い事が始めから解つてゐようと思ふ。又悪い結果が來やうと、たゞ信じてをればよい。上の人はさうなる事を豫期し、或は故意にさうさせて更にその後の結果を求めて居るのかも知れないのだ。善いか悪いかは死ぬ時迄解りはしない。絶對の信頼は往々上の者を暴君にさせるなどといふ者があるが、さう考へる事が既に信頼してゐない證據だ。自分は戀人に對する如き信頼を以て團體生活をしてゆかうと思ふ。

兎に角馬鹿になつて理窟はぬきにして上の者を心から信じて、自分の總てを委ねてゆかう。團體生活、部生活には信頼と服従が最も大切な要素である。

感想

堀尾貞一

蹴球部生活をする事既に三年半になるが、俺には未だ「蹴球とは……である」と云ふ様に簡単に片付けられない。

兎に角後二年半をグランドの砂塵にまみれてボールを蹴り
續け様と思ふ。

それで結論が得られゝばよいが、そうでなくとも一日く
の練習に後悔する所がなかつたら俺は嬉しい。

一番愉しかつたのは、青空の中を俺の蹴つたボールが快適
に飛んで行く時である。

蹴 球 部 へ

本 一 金 井 雄 吾

六年の春を球に籠め

一づに勵む道こそは

過ぎにし人の踏み来る

香ばしくも又儼なりし

涙と血との九十九折くじく

意氣と情熱との史なるぞ

二、團 樂 友

勝利の美酒も共に飲み

悲運の苦をも共に負ふ

部の爲なれば誠意もて

かたみに振られん愛の靴

されど信頼きあひみは彌増して

友の心を我は知る

三、團 樂

尺餘の霜の降り立てば

いろいろを圍む友の微笑

炎熱土を焦がしては

共に拭き合汗と汗

外づす心の蝶番

眞の友にあればこそ。

小生の苦詠を御笑玩下さい。冷汗物です。

(詩人荒井兄を偲びつ、深更三時に)

夏 日 雜 記

本 一 早 野 廣 太 郎

何もする事がないから、八疊の真中に寝転んで、真をふか
してゐるといゝ氣持である。ちつと耳をすますと傍を流れる
谷川の音にまじつて色々な鳥の音が聞えて来る。私は鶯と郭
公の聲に誘はれて、宿屋の印が大きく焼いてある下駄を履い
て外に出てみた。

左右から大きくうねつて寄せる綠波の接する所を、幅二間
ばかりの清い谷川が流れている。下手に向つて立つと正面に
吾妻山がゆるい麓を擴げ、右手には淺間の噴煙を眺める事が
出来る。小橋を渡つてそこの丘を登りつめると田代の牧場が
あつて、牛馬の放牧が行はれてゐる。私は此の丘の道をゆつ
くり歩いて行つた。どちらを向いても綠の世界である。所々
に野菊がびつしりと咲いてゐる。鶯の聲が急に近くでするの
で立止まつて先方を見ると、どうも行手の樹の蔭で啼いてる
らしい。隨分近くまで行つても依然として啼き続ける。や
あ、あそこに居るなと、眺めてゐるのも知らぬげに、脊のび
をして美しく切れた尾を震はし乍ら、山一杯の澄んだ空氣に
いゝ聲を響かしてゐる。これに反して、づゝと向ふの山の樹
立の蔭から、誰に呼びかけるともなく長閑に啼く郭公であ

今年の暑中休暇は、始めて山で過した。最初は此の非常時
に避暑などに行く氣はなかつたのだが、弟が足を折つて、長い
病院生活ですつかり疲れたらしいので、家の者が私と弟で
山に行つてこいといふ。幸ひ知人が有つたので、七月の末か
ら八月の半ば迄、充分山の氣に親む事が出来た。

私は子供の頃からつづと東京で暮し、學校も皆自宅から通
つたので下宿生活などした事がなかつた。だから、紹介され
た宿にぼつねんと獨り置かれた時は、なんだか頼りない氣が
して來た。弟に好い場所だから直ぐ來いと葉書を出してから
は、昨夜の汽車の疲れが一時に出て、頭がぼんやりとして來
た。それによても涼しい。女中が火を持つて入つて來たので
いつもこんなに寒いのかと訊くと、今年は特別ですと答へて
さつさと引取つて了つた。家に居るのとは大分違ふ。

る。太陽が青空と白く浮んだ夏の雲と、その下に接して擴る灰色の淺間山と實にその麓を綠に色づける廣い高原に、金色の光の波を満たしてゐる時、郭公の聲は、しらす／＼の中に夢の國へ誘つてゆく。こんな時に、閉じた瞼に眩いほの光を感じ乍ら草原に寝転んでぢつとしてゐると、あたりを飛ぶ蟲の羽音が、全身に響いてくる様な感じがする。併し夕方などには郭公の聲は、港を包んだ靄の中から聞える小さな船の汽笛を思はせる様なこともある。彼女の聲を耳にした者は、どんな悲みの中に居ようとも不圖眼をあげて彼方を見やるのであらう。郭公の聲は霧の中にぼんやりと濡れて光る行燈の様に、人の心の寂しさの琴線に觸れるものがある。

× × ×

昨夜はとても疲れてゐたので、ぐつりと快い眠を貪る事が出來た。眼を醒ましてみると、もう室に隅には火鉢うづ高く火が入つてゐる。其を見た時、夜中に何だか寒かつた事を思ひ出した。私は顔を洗つて散歩に出かけた。朝の太陽の光が、此の縁に溢れた高原を、歡喜に震へ乍ら斜に走つてゆく。木々は朝の挨拶を微風の中に交してゐるし、草の葉末に

少いので威勢よくさんぶと飛込む。湯はこ、から一里上の湯元からひいてくるので、割合に溫度は高いが、量は豊富である。二間四方の湯船に首まで浸つてぢつとしてゐると、湯の流れる音のみが聞えて、あとは森と静まりかへてる。先客の話し聲が突然響く。客は老人か二人で釣の話をしてゐるらしい。一人が得意氣に、去年はあの田代湖で船に乗つてやりましたが、目の下一尺五寸位の鯉が三つと、鰯を何貫かあげましてね、と云ひ乍らざぶりと顔を洗ふ。相手が驚きいつた様子で、ほゝう、といふと語を續いで、歸りに鮒は養狐場の狐にやりましたがね、と大きく出る。成程壁を見ると、船が五十錢、竿が一圓と書いてある。その傍に湯上りにつめたいピールをと廣告が貼つてある。これは山の食堂の廣告だ。

釣の老人連が籬腹をもんで快い氣持であると、剣をガチャ／＼棚にのせて、制服を脱いで入つて來たのは此の地方の巡査である。早速老人達と話が彈む。あそこの山からこちらの嶺まで二人で警戒するんですからたまらんですよ。と云ひ乍ら湯の湧口からガブリと一口飲んで、ガラ／＼喉をならす。次には此の温泉場行のバスの運轉手が元氣よくざぶりと入つ

は露がキラ／＼と輝いてゐる。私は歩きながら、どんなに遠い處にでも行く事の出来さうな勇氣が、身體中に満ちてくるのを感じた。歩け／＼と私は呟きつゝ坂を進んでゆくと、口笛が自然に私の歩調を軽くする。清冽な谷川を渡り、小鳥の鳴る野原を過ぎて丘の頂に來ると、私の喜は頂天に達して、此の誰も居ない草原で、胸の底から大きな聲で唄ひたいといふうち克ち難い衝動に襲はれて、力一杯聲をはり上げるのであつた。

朝の長い散歩にや、疲を感じて宿に歸つてくる途中、足の汚れを谷川の水で洗ふのも氣持がよく、宿について朝食前に小さな梅をカリ／＼と前歯でかみ乍らお茶を飲むのも楽しい朝の日課であるし、更にシュン／＼たぎる湯氣をみつめて、八疊の間に靜に坐つてゐるのも嬉しいことの一つであつた。

× × ×

膝をかたく組んで、机とのむつかしい本と太刀うちするのは私の性に合はぬらしい。經濟の本は忽ち私の頭を混亂の淵へ追ひやる。えゝ、氣晴しに温泉にでも入つてくるか、と手拭を掴んで立ち上り、宿の外の湯につかりにゆく。幸ひ人も

て來て、ガソリンの臭を洗ひにかかる。誰かゞ「あんたの職はのんきでいいなあ」といふと、「とんでもない」と反対する。今日もボロ車は二度もパンクしやかるし、給料は安いしと眼鏡をとつた細い眼をバチ／＼やる。丁度い、溫度の湯ではあるし、皆の口はやたらに輕くなる。自分獨りは聴き手となつて、狐の餌でも釣りにゆくかなゝどと考へてゐる。窓から山の上の白雲が見えるし、燕が忙しげに飛びあつてゐる。

× × ×

こんな所に長く居ると、むやみに人が戀しくなる。話し相手もゐないのでから、蹴球部の連中に葉書を書くのが嬉しい。景色のいゝ繪葉書に色々と書きつらねる。そしてその返事を首を長くして待つてゐる。毎朝帳場に手紙が来てませんか、と訊きにゆく。手紙が來ると何度も繰返して読み乍ら、青い空に大きくボールを蹴りたいなあ、などを考へだす。頭の中に友達の顔が浮んでくる。去年の明治には負けるではなかつた。あの時俺のロングショートでも隅に一發ビタリときまつてゐれば、どうにかなつたんだのに、等と空想は何處迄も發展して、際限がない。俺はやつぱり蹴球部で生れた男な

んだから、どうしても部と切り離しては考へられない。今度の合宿は今迄になく大いに頑張つてやらう、等と次から次へと歌の中に楽しい合宿の光景が去來する。

合宿の通知を手にすると益々落ちつかなくなる。吉澤が手紙をくれて、合宿には來ないような口吻で淋しくなつた『今に春の暖い光が吉澤の心を解く日も来るだらう。その日の來るのを神に祈らう』と心の中に思ひ續けた。

× × ×

本當の事を云へば、今度の合宿程淋しいものはなかつた。特に最初の間は人間も妙かつたし、皆の心も沈んでゐたかもしがぬ。併し皆が心を一にして秋のリーグに臨むべく全力を集中して練習した事は斷言出来ると思ふ。秋のリーグ戦！去年の恨みを晴すべき日は近づきつゝあるを思ふと胸が躍る。(完)

感想

吉田 富彦

暫らくで漸々秋のリーグ戦だ。今年こそは、今秋こそはと二部の優勝を目指して練して來た吾等が、今一層發奮すべき秋である。

春の合宿の始に小西主將の言はれた「試合は練習の總決算なり」の言葉を噛み締めて部員各人毎日の習に勵んで來た。「試合は……」言葉よりリーグ戦の各試合には吾々一年間の練習の結果が顯れて來るのであつて、秋こそ部員全體の春からの努力が積り重さなつて出來た力を發揮すべき絶好の機會である。練習によつて鍛へられる精神力と技術、其が全ての試合を支配して來るのだ。精神力は所謂各自の堅忍不拔の魂と部員相互の團結力であり、そして之等が備つた時完全なチームワークが生れて來る。試合に臨む者にとつて精神力こそ最も重要なものだ。技術はその精神力の上に築かれ伸さ

れたものでなくてはならぬ。魂の籠らない技術は之を生かして働く事が出來ないので、それは單なる形であつて、本當の術と言ふ事は出來ないであらう。

團體競技に於ける各人は團體の責任を背負つてゐるのである。一人の缺陷はチーム全體の缺陷として大きく表れて来る。そしてそれが惹いてチームの破綻となつて來るのである。目的達成の障害となつて來るのである。蹴球部員たる以上吾等は忠實な部員として自己の職務に精を出す事だ。そして一日の練習を反省する時、必ずや新なる希望を持ち得るものだ。各自が倒れる迄頑張るぞと、ボールを蹴り走る時御互に相通じて來る。互ひに苦しんで同じ境地で眞に心と心とが融け合ふなら團結は益々堅固になつて行くのだ。嘗て四部に落ちた商大サッカー部が三部、二部、一部へと進んだ歴史を省みても商大のチームが當時、如何に精神力に於も他チームに優つて居たかを知る事が出來よう。

長瀬大先輩の指導の下に甦つた商大サッカー部の傳統は實に之の苦難の時代に部員相互團結の各員の蹴球に対する熱情に依つて築き上げられたのである。己が魂を蹴球に打ち込ん

迷路

本一吉澤貞雄

個人プレイに於て聊が劣る吾が部にとつて之の傳統こそ尊いものであり、そして傳統にそつて、精神力を作り上げる爲にレギュラーもザブも一丸となつて練習して行く所に商大サッカー部の特徴があるのである。

私の今度の輕舉に對しまして、部員の方達が皆寛容な態度で見守つて下さつた事に對して深く感謝します。惟へば寸前まで迷つて居り、また尻も暖まらない私が、こんな一文を草する事は、あつかましい次第ですが、若し「勉強と運動」に關して、私と同じ様な昏迷と懨みとを經驗なさる方がお有りでしたら、参考にして戴きたいと思ひ、私がたどつて來た迷路をそのまゝ書いて見ました。

私が豫科二年の時「トルストイの復活」を讀んで、主人公ニエフニリュードフがカチューシヤに對する愛から人類愛に目覺めて行く過程により、人生に處する一貫した精神的な指針人生觀とでも云ひませうか、そんなものに對する人間の執着といふ様なものを啓示された様な氣がしました。尤もその前にも「人格の完成」といふ様な事も考へた事がありましたが、それは主として個人的に精神的な安易さを求める氣持からで、社會に對して積極的に働きかけるといふ面を缺いてゐた様に思はれます。

その後この執着は次第くくに強くなつてゆき、遂には丁度羅進盤のない船がいくら動いても目的に到達し得ない様に人生觀をつかまなくては何も出來ないし、又何をしても意味がないのではないかとさへ思ふ様になつた。然し當時の私は、これを如何なる方法によつて適確につかみ得るかに就いては何等緒も見出せ得なかつた。それで小説を讀んで主人公達が色々な社會狀態で色々に悩んでゐる様を觀ては、あの様な生き方もあるのか、この様な生き方もあるのかと、同情し考へさせられてゐた。翻譯小説など好んで読みましたが、ド

こんな状態で蹴球してゐたのではとても毎日が苦しく、どうかして普遍妥當せる部生活の意義を見出さうとあせつたのですが、生活の地盤を離れた觀念的な人生觀を無暗とあこがれて居た私には、生活の地盤としての蹴珠、生活のもつ大きな意義が目にうつらす、豫科三年を通じて私の部に對して持つ氣持はづうつと消極的でした。部誌四號に乗せた「部生活の意義再考」なる小文に於て考へた意義も極めて枝葉的なもので、當時の私にも不満足のものでした。

こんな氣持のまゝ本科へ入學したのですが、自由であるが故にそれだけ責任を感じさせられる様なその雰囲氣の中につて、經濟學に對する浮いた様な憧憬を強く感じました。

講義によつて受ける學理の深遠な感じは、幾ら勉強しても追つ、かないといふ氣持をあふります。生活を一元化して勉強に専心したいといふ切なる欲求は益々強くなり、空の目は活字を追いながら頭の中では「運動と勉強」に就いて考へる様な時が多くなりました。こんな状態では運動も勉強も出來ないと感じた時、僕は思ひきつて小西さんに退部の決心をお打明けしました。其の時小西さんは僕に僕の人生觀を尋ねら

ストエフスキイの「罪と罰」は特に印象が深かつた。然し小説は色々偉人の色々の人生觀を示して呉れるが、これが絶対だといふ人生觀は自ら思索し、哲學を學ぶ事により求められなければならないのだといふ要求が強く何時までも小説にひたつて居られない事を思ひました。然し、自ら思索するにも、哲學を學ぶにも、對象が餘りにも大きく漠としてゐるので、取つついでははねかへされ、加へて、自分の意志の弱さに禍されて、殆どこの方面では前進が出來ず、満されない氣持をまた小説で慰めるといつた様なするくした状態が續きました。こんな徹底しない状態に苦しんでゐる中に、この原因が徹頭徹尾自分の薄弱なる意志にあるに拘はらず、かへつてそれに目をそむけて、蹴球部の生活を疑ひ出しました。即ち自分の意志の弱いのも結局自分に確固たる方向が指示されてゐるからであつて、人生觀さへ確立し得れば、従つて強い意志も生ずるであらり。今の俺に必要なのは方向のみだ。こう考へたので自然論地とか學問とかに非常に惹きつけられ、それと一見對蹠的な立場にあると思はれる運動部生活に非常な重壓を感する様になつたのです。

それと同時に今こそ絶對的な人生觀を確立しなければならないと感じ、それが普通妥當せる意味を有するためには、識論の力をかりなければならぬと思ひ、偶々讀んだ出隆氏の哲學以前の推薦により、西田氏の「自覺に於ける直觀と反省」を讀み始めました。無智の勇氣は恐しいもので、私は専心の努力を認識論に集注すれば、自分の求めてゐる方向も數年を出でずして求められるのではないかと思ひ、又全ては智性により解かれ、書籍による啓示や思索等によつて自己の世界は廣まり、人格の向上もかくしてのみ得られるものと考へた。西田さんを讀み始めた時、當時は西田さんにより僕の世界が

日に日に廣くなつて行く様に感ぜられて暫くは非常に張り切つてゐた。

運動から離れ、家人の人達と雑談する事さへ意味のない事の様に思はれて、一室にこもることが多くなつた。この様に急に思はれて、一室にこもることが多くなつた。この様に急に思はれて、一室にこもることが多くなつた。この様に急に思はれて、一室にこもることが多くなつた。

ピツチで現實から離れて行つたけれども、當時は方向を求める間は仕方のないものと思ひ、あまり苦にならなかつた。

是くしてとりかゝつた西田さんの哲學は非常に難解であつてほんの入門した許りの私にとつてその學理には不可解の點が多かつた。三歩進んでは二歩退り又読み返すといふ様に、退々たる歩みの中に認識論の輪郭は浮び上つて來たが、その體系が如何に一般水準を遙かに越えた高い場所に有るかを現實に認識し得た。それと同時に私の求めてゐる實踐へ小規準としての認識論が、この結論を得て始めて實踐へ瀕し得るものとするならば、これは一生の年月を費しても或は不可能なのではないかといふ懸念が強くなつた。丁度この時と相前後して讀んだ漱石の「行人」はその主人公一郎を通して、觀念の泥沼に引込まれて、これを振り捨てんとすれども振捨て得なく觀念の世界で絶對の境地を得ようとし、事實一郎は絶對のではないかといふ懸念が強くなつた。丁度この時と相前後して讀んだ漱石の「行人」はその主人公一郎を通して、觀念の泥沼に引込まれて、これを振り捨てんとすれども振捨て得なく觀念の世界で絶對の境地を得ようとし、事實一郎は絶對の

嫌な毎日が續いた。丁度この頃が合宿の始まる頃で、私は何度合宿に参加させて貰はうと思つたかしれない。然し餘りに變轉し易い僕の氣持に、自分でさへ信賴がおけなくなつて了ひ、今の儘で何か打開策を講じよう考へた。それには今自分のやつてゐる勉強をもつと實踐的なものに近づけなくてはならないと思ひ。現在自分の有してゐる倫理觀を肯定し、この上に立つて經濟倫理を求めて行かうといふ點にまで考へ及んで幾分氣持も落着いたけれど、既に觀念的なるものに懷いてゐた絶對的な信賴と憧憬をうち破られた自分にとつて、蹴球部を離れてゆくといふ事は絶えず良心にうづいた。

上京した私は取敢えず、二階堂兄とお話をしたが、蹴球部を離れてはとてもやつて行けをいといふ氣持は決定的のものとなつた。とりわけ茂木が「人類愛を絶叫する事は易しいが、事實人一人を心底まで愛するといふ事は非常に難しい事で、自分は消極的かも知れないがそんなものを目標とする」と云つて呉れた時、私はそつとしておいた腫物をつゝかれた様な氣がした。

境地はかくなる可しといふ確信を得るのであるが、確信は強まるにつれ、絶對の境地は現實には益々一郎から離れて行つて了ふといふ様な慘酷な状態に、死以上の苦しみを體驗してゐる人間の弱い姿をみせつけた。

私はこの頃から人から、又理實から離れよう／＼としてゐる自分が急に苦になりだした。

今の様な道を進んだら、自分も一郎の様になるのではないかいふ危惧は、非常に大きな力となつてのしかゝつて來た。然し私は一旦あれだけの決心を披瀝してとつた僕の行動は早くも破綻の來ることにはたえられなかつた。一郎があんなになつたのは彼に性格的な缺陷が有つた爲なのだ。自分さへ強ければあんなになる筈はないと強ひて自分を勵まして、崩れんとする氣持を支へかゝつた。然しもうこの時は自分の行動に對する信念的なものは薄れて、意地的な要素が多分に入りこんで來てゐた。

かくする中にも蹴球部を離れたといふ責任感はたえず自分を尻から勉強ししろ／＼と追ひたてるし、一方一郎的な傾向は、氣の故か日に日に濃くなつて行く様な氣がして、とても私の迷路はこれからも未長く續くものと思はれます。然し部へ歸つて今更ながら生活の地盤を得たといふ感じに鼓舞せられ、これから道は全く迷ひ甲斐のあるものと期待してゐます。最後にしめ縁りの意味で感想を一題のせたいと思ひます。

我々は一度は觀念の世界に對して絶對的な憧憬を寄せるのではないかと思ひます。その様な時には、此々の事を讀書なり思索なりで得ると、自分はもうそれだけのものを眞に自分の人格的な厚みに加へ得たかの如き感じになる。すると知るといふ事が即ち偉いといふ事になり、見識の多寡によつてのみ人を評價する様になり、知識を求める態度は眞剣であつても、不知不識の間に自己の得た知識を誇る様になり、謙虚な氣持が失はれる様になる。又成果に到る過程に於ける辛苦の差は問題にせず、結果のみ見て、直ぐくさしたり、無暗にあがめる様になり勝ちだと思ひます。僕が部を止める様になつ

た時は多分にこの様な氣持がありました。

これと對象して部生活を考へる時、毎日グランドへ出て練習を続ける時、我々には何時も感ずるのは、我々の弱さです。部のため皆のため一心にやらうといふ氣持、いやそんな氣持を超えた無我の境地こそ我々が理想とするのであります。部の醜い我執のとりです。そして私はこの我せうが、事實私は醜い我執のとりです。そして私はこの我執を少しつゝも除かうと努力する事に大きな張りあひを感じ、同時に謙讓の氣持の培はれん事を朝待します。又一回の優勝にも、又部の一寸した雰囲氣にも今迄何年か或ひは何十年かに恒つて眞摯なる先輩が苦心して築き上げて呉れた、努力や傳統を感じ得る機會を有する。この様な恵まれた機會を自分から生かして行けば我々は無暗に物をくさしたり、否定は出來なくなるのです。又それと同時に我々が一心に蹴る事は、或は我々が人格を向上させ事は、それがその儘僅でも部の傳統的實力、部の雰圍氣にしみこんで行くといふ事考へただけでも嬉しい事です。

私が前に生活の地盤を得た感じでとても嬉しいと云つたのは、私が心身共に打込んでゆく一つの生々とした對象か、手だけでも嬉しい事です。

私 の 心

本一荒川守之助

あこがれ、夢を持つことは大切だ。けれども餘りロマンティクに世の中を想ふと、極端な功利主義者か世捨て人にならざるを得ぬ。

現實に生きんとする者は、先づ現實を知るべきである。懷

疑も必要だ。肯定も必要だ。だが、私にとつて最も必要に感ずるのは経験を積むことだ。素直になることだ。素直になつて現實を知ることなのだ。(一九三八・九・二七)

断 片

本一清

水

睦

- 退屈でそして憂鬱な毎日。
- 話したくない、聞きたくない、獨りで居たい時。
- 焦思と苦惱。
- 何もかもいやになる諦感の誘惑。
- 生きる事の困難、弱い俺。(一九三七・一一)

今年は日記でも何でもいいから、必ず全部貢出せと云ふ事になりましたので、何か書かうと思ひましたけれど、どうにも書けませんでした。そこで日記でもと思つて去年の秋の日記の中から取り出しました。部誌には非常に不向な断片であります、此は決して失戀の歌とかそんなのではありませんが、

近にあるといふ感じなのです。

以上の文で私は觀念的なるものに就いて小生意氣な事を並べましたが、決して觀念的なるものを排撃するわけではありませんし、又私自身その資格は全然ありません。只觀念的な物に限界があるといふ感じを疎離を述べた次第です。我々は蹴球に専心する一方、勉強に對する執着は飽くまでも持ち續く可きだと思ひます。限られた時間に、眼の目をこすりながら本を讀もうとする氣持は又非常に貴いものだと思ひます。

今年も亦鈴木主將を始め六人の良き兄貴を部から送り出した。本三の人々は部を去り社會人として人生の新らしき道へスタートしていく事は學生の部として常の事であり、唯徒に淋然となるべきではなく、寧ろ新社會人と成られた諸兄に對して慶賀せねばならぬが、然し一沫の淋しさ無きにしも有ら

豫科三 鈴木英二

すである。其の淋しさも、新入部員の活氣ある空氣の爲に徐々に薄らいで行くやうな氣がする。

× × ×

昨々は吾々球人の死闘報いられず遂に二部轉落の浮目を見てしまつた。思へば四部より一部へ無停車上昇を爲しホットした氣の弛みへ神が與へられた試練であるかもしれない。吾々は此の試練を吾々青年の持つ獨特の若き意氣と、熱及び愛部の心を以て反撥し見事打勝ち商大蹴球部の光榮ある傳統を保つ事が吾々の使命である。反撥力だ!!

× × ×

團體とは其の構成分子たる各個人の氣持が或目的に對して一つの形になつて、真正面からズツかつて行く時に其の潜在力、實力以上の力を遺憾なく發揮するものであるが、さもな時は團體とは有名無實の存下となるのである。

蹴球—團體競技—は社會の縮圖である。故に部員は立派な社會人があり、社會即ち部に融け込む事が必要だ。

團體では利己感情の強き者をば最も強くきらふ。現在の蹴球部には其の氣持が相當芽生えつゝある様な氣がする。

みである。

× × ×

大した事は書けないのでつまらん事であるが、思ひ出しますに書いてみました。(十二・九・十二)

隨感

一、苦しみ

自分は生れてから未だ眞險に苦しんだ事のないお坊ちゃんだ。俺はもつともつと眞險にならなければならない。漱石の虞美人草に「人間は眞面目になる機會が重なれば重なる程出来上つて来る」これは宗近君が小野さんに詰つて居る一節だ。人間苦しみのない様な道は嘘だ。人類の爲、梁の上に死んで行つたキリストの偉大な苦しみが少しでも分る様な人間になりたい。

眞面目な苦しみの後に来る心のしづけさをしみく味つて

吾々部員同士は上級生、下級生、クラスメイト等の單なる友であつてはならない。皆兄弟の様に愛と情を持ち、其の間に何のわだかまりのない眞と眞とのつき合でありたい。自分も部員の中に「心の友」を持つて居ないが、今後多くの人々と共に語り、心の友を求める可く努力し度い。

本當に吾々はグランドのみの友でなく、生涯の友を持たねば意味ないと思ふ。

× × ×

商大蹴球はその昔から技術のチームとしてより精神力の強いチームとしてその存在を確保して來たのである。吾々は強い精神力を以つて拙い技術を十分に補ひ得るのでないだらうか。試合にしても、練習にしても、同じ様に頑張り疲労の爲に體も動かず消耗して來る時に「何此の奴郎!」の氣概で此の疲労を吹飛ばす—外を内を以て補ふ—此の時此の氣持こそ尊いものであり、又勝れたるもの様に思はれる。

× × ×

浦高戦遂に敗退!! 何の言葉も出ない。秋は雪辱を誓ふの

るたい。

二、團體のリズム

七月八日、今朝新聞に面白い記事が載つて居た。中村研一の「上海の宿」といふ話だ。旗艦出雲に不思議にも爆弾が當らなかつたと云ふ事について一つの解釋を下して居る。「私は人の和を信ずる。軍艦の各部門が最大能力を出して敵に對抗するのである。一つのあやしいものそれをその威光で射すくめるのである。共同生活が最高潮に達した時、そこから出るリズムの様なものが敵彈をして當らしめないのである」と。自分の蹴球部の雰囲氣を愛する。蹴球部の雰囲氣の中には獨特の眞摯さがあり、獨特の強さがある。先輩達の共同生活の強さを思ふ。此を失つては駄目だ。これを展ばさねば駄目だ。そして俺達の獨特のリズムに生きるのだ。

筆のむくま

一

或一つの團體を形成する所には、其處に指導的立場に立つものと、被指導的立場に立つものが存在して、其の團體自らの働きを爲すのは一般であり、又必然的なことである。大きく見て國家に於てもさうではないか。ヒトラーといふ大指導者があり、その下に被指導的立場に立つ數多の國民が存在し、夫々が自己の働きを全うしてこそ今日の如き偉大なる獨乙が生れ出て來るのではないか。この兩者の中どちらの一方も缺けてはその働きは鈍り、或は爲されないのである。夫々の相異つた作用が融合して其處に一つの大きな力としての働きが生ずる。ヒトラーは其の著書に一般國民は無智であると又其れ故に指導者の地位に立つ優なるものが必要であると書いてゐる。この記憶は多少違ふかも知れぬが、根本に於てはさう大なる誤謬はないものと思ふが、何しろその無智なるものが必要なのだ。無智と言つても馬鹿や白痴の其れではないことは勿論だ。所謂經濟國家の能なきものを指すのであると思ふ。即ち、上に立つもの、實行する管理を批判し、或は案出することは出來ても、その實行するだけの大きいに適くとも僕等は其處に到達せんものと足搔いてゐる。サツカーハトを通じてそれを求めてゐる。經濟戰に立つ闘士として何より必要なものは何物をも包含する腹と、嚴然たる實行力即ち強い意志だ。さうだ強固なる意志の所有者こそその世で最も幸なるものだ。もう一度言ふ、僕等はそれを求めんと足搔いてゐる。

三

夕靄立ちこめる小平の森、畠、それ等の間をゆく、校門より豫科前驛への廣い道を何んともいへぬ快い疲勞感を満喫しつゝ、點々と、或は友と相語らひつゝ歩みを運ぶ氣持、やつと驛にたどりついてふりかへり、夕べの西空に映え出る校舎を見る時に打たれる感じ、何かにつけて何時までも思ひ出となりさうな毎日々の出来ごとだ。いつまでたつても懐しいことであらう。

しないの意であると思ふ。

今こゝに吾がサツカーハトを見た。國家との比較に於て所謂ゲゼルバヤフトと、ゲマインシャフトとの問題に於て非偶然性と偶然性の相違はあるにせよ、我がサツカーハトは小なりといへども一團體を爲すものだ。各自が夫々兄弟であるといふことを忘れずに以上のことを一考してみる必要はないだらうか。

二

部生活浅いものではあるが、サツカーハトを爲す意義について種々考へる。何を好んであの苦い（少くとも自分には相當苦しむことがある）練習を毎日々々してゐるか。局外者から之を眺めたら馬鹿に見えるかも知れない。しかし僕等は苦しみの中に何等かを求めんとしてゐるのだ。それは何か。

僕等は何で商大豫科に入學したか、入學してから何を目的として生活してゐるか。即ち人間を造ることの爲めにだ。國士としての經濟人たる腹を造るための毎日の生活だ。しかしこの腹、相當大きなものだが、樂しく得られさうもないものである。僕は苦しみの中に於て或偉大なもの、それに

雜想

豫科三 松岡 義彦

近頃ふとした折に、豫科時代の餘りにも早く過ぎ去つて行くのに愕然とする事がよく有る。新入部員歡迎會やその他のコムバや、又は日常生活に於ても、若々しい、本當にフレッシュといふ感じのする彼等を見たり聞いたりすると「あゝ、もう一度豫科一からやりたい、さうしたら……」等と、とりとめのない空想に陥る。此は自分よりも、より一層若い者に對する本能的な羨望とか云ふものも有るだらうし、何時の時代にも昔を懐しく思ひ出して、その氣分に浸つてみたいと云ふ事も有るだらうが、それだけならそんなに強く感じないだらう。自分の今日迄の生活に何か間隙が有つて、どうも物足りないと云ふ氣持があるからだ。

僕は元來生活態度がどうのこうのなんて云ふ事はろくに考へもせず、「なる様にしかならない」と、至つて冷評的な氣

分から、所謂その日暮しをやつて來てゐるし、又そんなに反省してゐる事もなく（そのくせ後悔はよくするのだが）従つて發展的な所の少い人間なのだが、豫科三年にもなつたらもつと人間もしつかりし、もつとしつかりした信念もてるものと、期待してゐた。特に蹴球部に於ける自分をみる時、昔想像してゐた豫科三年の自分とは總ての點に於て大變な距りが有るのに驚きもし、又淋しくも感する。

一體蹴球にしても、何にしても、或事から何かしつかりしたものを握み取つて自分のものとする云ふ事は豫想以上に困難だ。第一僕なんかには、かう思つたからかうすると云ふ積極的な氣魄とか、勇氣とか少し。あゝ、かう、思つてみるだけで、たとへ何かみつけても、貧弱な経験から教へられたいろいろの障礙をあれこれ考へて、先づ行動に移る力とか熱情を失つてゐる。そして結局何もしない事になつてしまふ。その點、かうと決心したら、猪突的に前進出来る人が羨しい。そして此の何もしないと云ふ事がギャップになつて何かはつきりしない氣持が、晴々しない渣となつて心中にたまつてゐる爲に、空虚な感じがするのだらうと思ふ。物事に

拘泥せぬ、若さからくる潤達と云つた様なものが欲しい。もつと若々しい、積極的な態度をと、もつと明るい確固たる希望を持たなくてはならない。

秋 は !!

豫三片山光夫

誰かの句に、

蟲の音の中に喫出する寝覺かな

といふのがあるが、暗い闇の底から静かな訴へるかの様に啼いて居る蟲の音を聞き乍ら、机に向つて居る氣持は何とも言へない。僕は四季の中で最も秋を、しかもその夜を愛する。秋の夜の静けさ、うすら寒さ、又秋の夜に響くあの單調な時計の音、此等は總て秋の夜の表象物であり、又これが僕の最も愛するものである。明け放された窓から入り来るうすら寒い北風に目覺めて疲れた體を窓によせ、高い／＼大空を眺め、あの冷たさうな光を放つ星を眺める時、我等は一種の

束縛から放たれて渺々と續く果の無い大海に乗出して行く様な氣持になつて來る。何時見ても變らぬ、憐みのこもつた秋の星は僕の心を遠大に、將來への思索を持たせて呉れる。

× × ×

得ないのである。

秋!! 秋と云へば誰しも、少くとも我々若人は「スポーツシーズン」だといふ事を考へるであらう。天高く馬肥ゆる秋僕はグラウンドに立つて清く澄渡つた空く／＼ボールを蹴り上げて見たい衝動に駆られる。僕ばかりでなく總ての人が暑さに飽いた五十幾日の真夏の世界から開放せられて、大地の上で思ふ存分飛廻つて見たい事と思ふ。此の秋こそ吾々の身體を鍛へるべき時なのだ。スポーツのシーズンなのだ。又誰も、就中我々學びの友は、古より「燈火親しむの候」と稱して居る様に讀書に最も適した時であるといふであらう。何となく秋の夜は讀書に耽り易い。此も秋の偉大なる自然の力に依て、靜寂さ、深遠さが人の心をさうさせ、その境地へと引入れるのであらう。藤村にせよ、漱石にせよ、きつと秋の夜を味つたに違ひない。そしてその力に依つて讀書を進めた事であらう。又吾々も此の秋の夜に親しみ、讀書に耽らざるを

戰 の 前 夜

豫三櫻井孝次

茂木が訪ねて來る。約三十分許り話して送つて出る。上弦

の月が東の空に懸つてゐる。一人は無言で歩く。草の上に煙突の影が長く映つて、静かに揺れてゐる。明日の天氣は好いだらう。茂木と別れてあてども無く散歩する。

蹴球を始めて二年、それは血と涙との思ひ出である。一年前の合宿に春雨のそば降るブールを見ながら、家路へと急いだあの悲壯な氣持は、今でも私の胸にはつきりと刻みつけられてゐる。

明日の戦はどうしても勝たねばならぬ。幸ひにして未だに走れる自信はある。倒れる迄、否タイムアップの笛が響き渡る迄は、あくまでも頑張るのだ。

初夏の快い風が頬をなでる。何時しか人通りの無い田舎道に出て了つた。静かに歩く。戦をして全く澄み切つた氣持である。

(五月十四日夜)

豫二居川達一

雑感

所感

豫二村木杉太郎

人

今やサッカー部は三十有餘名の多きに達して居る。人の性質は十人十色と云ふが、かうして三十數名も居れば、又其所に色々の變つた氣持を持つた人が居る譯だ。従つてそれ丈、サッカーをやると云つた氣持、又部に對する態度と云ふものも異つて来る譯だ。或人は熱情に身を任せ、感激の中に部生活を送つて居るかも知れない。従つてその表狀も亦種々あるのも否み得ない。或人はその天性によつて快活に皆と交つて行く人もあるが、又反面には無口に静かにして居る人もある。だがかうした色々異つた感情の中に、その根柢に流れる何が一つの統一された氣持があるに違ひない。最も重視されねばならないのは此の氣持だ。此の氣持あつてこそ、我が部の生々とした發展を望み得るのであつて、表面的な皮想的な他の何物でもないと信する。最も危険な事は此の表面的な觀

僕が蹴球部生活を始めて一年有餘になるが、未だ蹴球部精神の真髓の一端にさへ觸れる事の出來ないのが恥かしい。

色々先輩の話も聞いたし、上級生の命する儘に一生懸命になつてグラウンドを走廻つて來た積りなのだが……。

× × ×

練習を重ねた、重苦しいシーズンの練習。

だが何と云つても真先に思出されるのは、對明大戰の後マネジャーのホイツスルの下で、暗くなる迄、唯黙々として邊りに人影の見えない、夕闇に包まれたグラウンドで選手は勿論、我々迄泣いて雪辱を誓つた時の事だ。

そして今又、來るべきものへの精神を積んで居る。

× × ×

兎に角馬鹿になつて六年間蹴球をやつて行く覺悟だ。

察に依つて、その根柢にある氣持迄も疑ふ事だと思ふ。サッカー部傳統たる團結と云ふを考へる度に私は以上の様な事を何時も感じる。以上甚だ簡単ですが、私の感じを卒直に申上げて擱筆します。

豫二水島竹

渺々たる大洋の眞唯中に一隻の帆船が走つてゐた。海は金色に輝き、空には二つ、三つの雲が浮んでゐる。その船は、と云へば、まだ風雨で汚されてゐぬ眞白の帆をした、綺麗な船である。他の人が眺める時、それは何處かに着くべく走つてゐる樂しさうな船だと見るに違ひない。

然し、船中は闇であつた。

「俺達は何處へ向つて、又、何の爲に、こうして走つてゐるのだ」と今迄黙々としてゐた船員の一人が、半ば獨言の様に言つた。

「さうだ。何の爲に」と甲板の方に寝てゐた男が半身起して叫んだ。「何の爲に俺達は生きてゐるのだ。今今迄俺

達は波に身を委せてゐたのだ。波が東すれば東し、西すれば西して、俺達が生きてゐる事は事實だ。然し、それは何の爲にだらう。俺達は今迄、何も考へてゐなかつた。自分でありながら、自分でなかつたのだ。俺達は目覺めねばならぬ」まだ言ひ續けようとした時、その聲に目覺めた一人が不快さうに遮ぎつた。

「止めろ。何をぶつ／＼言つてゐるのだ。狂人じみた事を言ふのはよせ。貴様は俺達がこうして生きてゐるのが、有難くないか、俺はこの世に生れた事が嬉しい。俺は此の人生を楽しめる限り楽しむのだ。俺達は死といふ者に會はないのだ。何故といふに、生きてゐる中は、自分で、死ねば、俺でなくなるからだ。此の海、あの雲。俺は歌ひたくなる。戀、詩、そ

れは俺だ。
俺は運命を信する。人間が運命に操られてゐるが故に、俺は夢に生きるのだ」

數分の沈黙が續いた。と一人の瘦せ衰へた、髪も亂れてゐ

一年を顧ふ

山田久寧

「部員に加はつて早や一年」と云ふも月並の言葉ながら私の胸中には此だけの事しか無い。今一年を回顧して轉々感慨無量の物がある。實に短い一ヶ年だつたが其には私の十九歳を總て懸けた思が籠つてゐるのだ。

己の不勉強に依り浪人の一年を送つて、命賭けて突破を誓つた入試にも首尾よく合格者氏名中に名を見出した喜に次ぐに記念祭、ボートクラスチャン等と我を忘れた、有頂天の月日も夢の中に過ぎた。實際度重なる記念祭も、入學した年のが最も樂しい。況や苦しい浪人を清算した年に於てをや。ボートクラスチャレも私が生れて初めて初めて経験した感激であつた。H組全勝の中に唯一組破れた私等は全力を擧げた満足の中よりも流れ去つた無念さ、残念さの方が強かつたのを如何ともする事が出來なかつた。

る男が、弱々しく唸いた。その顔の多い皺に嫌惡の情を満たせて、

「全てが偽りだ。全ての事が偽瞞だ。彼奴等の言つてゐる事は偽りだ。俺は人間が大嫌ひだ。偽りの中に偽りて暮す人間が大嫌ひさ。

眞理！ フ、ヽヽヽ、眞理か。萬物が偽りなのが眞理さ。理想なんて、自己偽瞞さ……」

「貴様の言つてゐる事も偽りだらう」と前の奴が茶化す様に言つたが、返事もなかつた。皆は又、眠り込んだらしい。

數年後、私はその船が、船體はボロボロで、帆も種々な色に染つて、漂つてゐるのを見た、といふ噂を聞いた。

新部員諸君よ。諸君が目を開いて、自己の信念の下に、我が部を愛し、サツカーに、又他方面に、精進せられる事を望む。

八月の合宿以來部の末席を穢して兎も角ボールを蹴り出した。秩序立つた練習も初めてあれば、蹴球の試合を見たのも生れて初めてだつた。足を痛めながらも無理して練習し、ボールの中天に舞ふ爽快さに酔つたのも嬉しい生活だつた。神無月九日試験直前より始まつた對校試合以來負續けた部にも本當を懲悔すれば大して感を懷かなかつた。其が望を掛けた最後の對文理大戦にも後を取つて、泣き沈む選手を神宮の控室で取り囲んだ時、小西さんに「皆此をよく覚えておけ」と云はれた言葉も聲も未だに忘れられない。此の一言に依つて私の部に對する考も定まつたと申して過言では無いのである。

今春以來部員諸兄の熱心且つ眞剣な練習にも拘らず、悲憤の涙に瞪泣きする事が多かつた。負けて泣くのは其處等の女學生だつて爲るんだ。涙の乾く暇もなく、其時其場から次の練習に雄々しくも立上つてこそ男なんだぞ。戰ふ以上勝たねばならぬのだ。故飯塚部隊長が明治に在つた頃學生に「スポーツ精神とは敵を軍門に降す事である」と云つたのも良く此の一端を穿ち得た言と言ふすべきである。かくて一年の夢の間

に過ぎた。

「蹴球は小學生の時分から練習してなきや本當に上手にならない」と云ふ。もしも此の公理が普遍妥當ならば本學の蹴球部には上手は居ない事になる。事實慶應、早稻田の奴等にして技術的に感心する様なのは先づ見當らない。私に較べて「少々蹴球らしいな」と思はれる者ぐらいである。此の部で、此の技術で如何にして敵に勝つか。其は一に意氣、二に意氣三に意氣、實に意氣あるのみである。私はその意氣も氣概も總て補缺より得られると信ずる。

選手にはスランプもあらう。試合に出場せねばならぬ以上

無理に練習して頂いて試合に出場不可能になつては困る。然

しサブには其の心配は無用である。足が痛ければ四ツン這になつて練習しろ。頭痛があればグラウンドを十回程廻つて見ろ。其れで眼量がすれば逆立しろ。大抵の病氣は治つてしまふぞ。こうして選手を激励するんだ。古い部誌に長瀬さんの言はれた言が有つた。「部の興亡はより良きサブからだ」と我等サブは唯小西さんの元で黙々として練習すれば良いのだ。ポート部に「吾人屁理窟を知らず、幸にして元氣有り」の

言が有る。「良きかな言や」と思はず快哉を叫ばずには居られない。

唯黙々たる練習有る耳だ。泥塗れの練習に自ら哲學も生れよう。唯屁理窟とは哲理に非す。元氣有りとは勉強しない事じや無いのを知つて思索すれば良いのだ。部員諸兄よ。

元氣一杯一部昇進を實現しようぜ。

私は不幸にして今夏痔の入院加療後合宿參加は父の許す所とならず、出席致さなかつた。實に殘念である。技術の低劣さと體の驗かないまゝに恐らく六ヶ年を補缺で送る事と思はれる。益々サブとしての決意を固めると共に、長瀬さんの御言葉を金科玉條とするを御誓ひする。

グラウンドに這ふ

豫 一 三 育 茂

蹴球に身を溺らして是に五ヶ年、春麥伸びて入學、今や我世の春を謳歌して商大サッカー部に迎へられた。感激、正に感激、及ばずながらもサッカー部の一分子として六年乃至そ

れ以上の一橋生活を有意義に送らうと張り切つて居ります。

喜んでは是に酒杯を廻らし、悲しんでは共に涙ユニホームを絞るかや、この感激は同部員でなくては嗜むことの出來得可からざる感情のクライマックスである。よしや前途に多大の障礙の待てりとも、よしんば好成績の得られざるとも、サッカーをプレイする意氣と熱と力と研究と體力を以て世に處さばそこに眞の男子の目的は達せらるゝに非ずや。白いユニホーム、緑の櫻林、白堊の校舎、コバルトの青空、混然と際立つて小平の野に一幅の泰東名畫を浮立たせてゐる。面白い上級生諸兄の顔々々、そこには何の蟠りもなく、何の氣兼ねもいらない。そこだ。何年か商大のサッカー部を憧れ、長年サッカーを楽しんで來たのは。話をすれば爆笑連發し、而も黙つてゐて氣まづくない。といつて締める時は互に叱咤し時には相抱いて泣き、相擁して喜び合ふ。サッカーの精神は正に其處に存在するのである。馬鹿げた漫談を續けて來たが自分はサッカーに對して何を云はうとする者ではない。唯己れを殺して練習すればよいのだ。と悟つた。



(3)

新入生紹介

橋本 康三郎

出身は中等學校の名門高師附屬。中學時代ボールを蹴つて居ただけに、先輩連は彼の好技に一驚した。顔を見ると、豫科生らしいが、着物を着て、帶をチヨコント結んだ所はまるで小供である。身體は小さいが、コマ鼠の如くチヨコト走るので一般に大陸的なバックスの眼を眩ますのに適してゐる。氣性はキツバタとして明るい朗なスポーツマン型。併し合宿で餘り宮澤君の眞似をして、宮澤君を憂鬱にさせたこともある。宮澤君嘆じて曰く。「いやんなツつあふよ。』

潮藤俊雄

彼は入部以來そのイキゾチツクなキツクを以て米山マネーデヤーを驚かした。更に部の者は、彼の脚の偉大なるに眼を大きくした。ボールの形が悪くなるのは、彼の爲かしら等と心配する者もある位だ。デヤスマートした彼のキツクは大砲の弾の如く、ネットも多大の損害を受けつゝある。又彼のミスキツクも勇壯で男らしい。グル／＼と二三回廻つて漸く停止する。F・W・をやつてゐます。

青木育郎

彈力の有る身姿を以て、グランドを縦横によく走り廻る。膝の關節がのびた様なキツクをするが、どうしてなか／＼好い球を蹴る。C・Fをやつてゐるが、人は往年の浅枝さんに姿が似てゐると感心する。元氣一杯な若々しい人だ。

三 脣 茂

後藤さんの後輩として、ゆく／＼は虎の皮にありつけるかもしだ。橋本と共に技はなか／＼秀れてゐる。彼を花壇の中に立たせたら蜜蜂によく似てゐると思ふ。彼の名前はミツハシと讀む。一寸と類のない名で、活字を組むのに困ることもある夏の合宿の娛樂大會で狩森さんとの碁の決勝戦で見事勝つて、虎の輝の代りにバイクをものした猛者。

荻原伊器夫

山の脊に月が出ると誰かに似てゐるなあと思ふ。十五夜お月様。彼は童話の世界から來た様にまんまるな顔をしてゐる。狩さんと飯の量では甲乙をつけかねる。兩人を並べて、どちらがスマートかといふ事は誰も決定する事は出來ない。もう少し瘦せる様に心掛ける必要がある。

吉岡敏夫

秋から入部した人で、運動神經の發達してゐる人だ。神戸出身だから金井、吉田、堀尾などの後輩だ。變な先輩を持つて氣の毒だが、まあ氣を落さずしつかりやつてくれ。

増井健二

餘り身體がよくないのに、皆と一緒によくやつてくれた。風邪がもとで休部されるとか。一日も早く全快されん事を一同と共に祈りしてゐる。

入部挨拶

調査表

豫一青木育郎

橋本康三郎

一、大正八年十月十二日生。當年廿歲

四月入學と共に入部致しまして、既に半年経過しました。今迄歩んで來た道を振り返つて見ますと、只夢中であつたとしか思へません。併し私は此の六ヶ月間の蹴球生活——といふのは餘り短いが——が愉快であり、又有意義であつたと公然と斷言する自信を持つて居ります。私は夢中でボールを蹴つて居れば間違ないと思ひます。單純、馬鹿張り切り。私は其所に生命を見出したい。

兎に角、今後六ヶ年諸兄の御指導の下に蹴球をやつて行きたくと思つて居ます。

一、大正八年十月十二日生。當年廿歲

一、東京商科大學一年一組に籍を置く。席順卅一番。

一、麻布安藤幼稚園卒業。

一、麻布本村尋常小學卒業。

一、東京高等師範附屬中學卒業。成績は常に優等。

一、身長五尺三寸（自稱）

一、體重十四貫（同）

一、特徴。頭腦明晰にして一見青白きインテリ風なり。

一、愛讀書。バイブル。

一、好物。壽司。やきとり。やきめし。

蹴球偶感

豫科一年萩原伊器夫

入部所感

豫一瀬藤俊雄

蹴球部に入つて五ヶ月。夏の合宿も終つて今まで感じた事を漫然と述べたい。

× × ×

商大に入り寮に入り時々感じたことが學生そのものの中に何となく浮ついた所が多いのではないか。何か逞しさといふやうなものが足りないのではないか。而して時代は逞さを要求してゐるのだ。俺は小平の練野でボールを蹴つてゐる時緊張した一種の感激の身にせまるのを憶える。逞しさが得られるやうな氣もする。とに角俺はボールを蹴るのが好きなのだ。

今日は何となく落ち着かない日だつた。どうせ終には出るに極つて居る教練も五時間目の餘鎌が鳴つても未だ決断出来なかつた。此の暑さでしかも少し風邪氣味なのに、あの活氣に乏しい教練をやるのは真平だ。入學後頓に氣を失つて教練、體操の時間等、苦しみを感じる程だ。然し此の貴重な一時間を休んで空しく氣を静め様と努力しても、本の二三頁も讀めるのが闘の山だらう……。

出るに出てやつと授業が終つた。運動部の連中は嬉しさうに、あの苦しさうな練習に出掛けて行く。何も用の無い自分は机に向つて出氏哲學以前の表紙を開いた。然しどうしても落着いて讀めない。どうしてだらう。僕の長所でもあり短所でもあるお人好し、協調性、此の變な奴の爲に皆と話の歩調を合せ、感情を害さない様にと、こんな配慮ばかりに氣を使だ。

つて近頃は少し神經過敏になり過ぎたのだ。

時々落付かない暗い沈んだ氣持になつたり、自暴氣味になる。睡眠不足の日が續く。そして益々神經は過敏になる、同室の奴の仕草迄癖に障る。然し、じつと隠忍して口には出でない、否出せないのだ。胸の中に藏つてある不快、反感は次第に増加して癌の様になる……雜念は續く……。

僕が蹴球部に入つて居なかつたら、恐らくこんな毎日を暮して居る事だらう。練習の無かつた數日の肩の時間を集めればこんな日記になるかも知れない。僕の性質に似て居ること主人公が案外寮の何處かの隅の方に居る様な氣がして仕様がない。彼は己の哲學を難しい方面から難しい形で求め様と努力して居る。そして彼のその苦しい精神的労働によつて力強い意志を失ひ、理性の敏活性と明晰な判断力を失つて居るのを知らないのである。

僕の部生活は未だ六ヶ月に満たない。蹴球に關する智識も乏しいし、未熟な経験を以てしては感想も上手には云ひ表はせない。然し僕が最も蹴球部に入つて有難く感じた事は球を蹴れる様になつた事ではない。よい上級生を友達に持つて都

合のよい事でも無い。實に毎日が充實して生氣に満ちた生活の出來る事なのである。

本科の某君の話を小耳に挿んだが「球を蹴つて居る人は、大體蹴球が面白くてやる人と、その技術の進歩を樂しみにしている人とに分けられる」と。僕は幾分前者の氣味の様だけれど、今はそれも考へず、豫科三年球を蹴つて解るといふ。その蹴球の解る日を樂しみにして球を蹴らうと思つて居る。

所 感

一年六組 三 猪 茂

蹴球部に入つて既に六ヶ月は過ぎ、やうやく蹴球部が分つたやうな氣がする。然し理解出来ないことが多々ある。それもその内に分つて来るだらう。近頃風邪をひいてすつと練習を休んでゐるが休めば、休む程ボーレルが蹴りたくなる。練習を見てゐると實際飛込んで一緒に蹴りたい氣がする。今年は二部から一部へ昇格する年だ。第一軍の人には大いに張切つてもらはなければならないのは勿論、サブの人にも大いに選手を勵して試合に勝たねばならない。

蹴球部が健在である限り試合には勝たねばならない。

各 Position について

編 輯 部

最近英國蹴球協會から“An Instructional Book of the Football Association”といふ小冊子が發行された。之には吾々の参考とすべきことが多く含まれてゐるが、こゝにその全部を紹介することは紙面の關係上出来ないから、今その中の第二章 Individual Positions の而も essence とも言ふべきことのみを列舉して見ようと思ふ。

(1) Full - Back

○條件——強い Kick を持ち、良き Position Play たること。その上に身體が強大で早く走れ、ば申し分ない。

○實際にあたつて、先づ自分の前に居る Wing-Half と、mark する相手を決めること（どちらが Wing を、どちらが Inside を mark するかを決めること）が大切である。此の決定が基となつて Team 全體の布陣が定るのである。

- Tackle を多くすると疲れるから、頭を働かせて Position play をやり、敵の Pass (殊に Wing への Long Pass) をカットするやうに掛けろ。
- 2人の Full-Back が goal-line と平行に一線になることは注意すべきで、かうする一線に此の線が下り氣味になつて、敵の Forward は球を持つてから Full-Back が Tackle する前に相當時間がかかるからその中に十分に control してしまふ。
- Full-Back は dribble すべからず。又 tackle されるまで球を持つてゐることは絶対にいけない。切迫した場合にはタッチへ蹴り出さか Goal Keeper に戻すか、最後の手段としては敵に Corner をあたへても仕方がない。而し兎に角 Full Back が球を持つてゐて敵に Tackle されると言ふやうな不覺なことをしてはいけない。Keeper は back pass する場合には注意深い鋭い判断が必要である。

- すべて Clearance は殊に餘裕のある場合には Pass の積りで出さねばならない。而して必ずしも Forward へ直接に出さないでもよい。又 Forward より前の方へ出しすぎとはいひない。

各 Position に就いて

編 輯 部

最近英國蹴球協會から "An Instructional Book of the Football Association" といふ小冊子が發行された。之には吾々の参考とすべきことが多く含まれてゐるが、こゝにその全部を紹介することは紙面の關係上出來ないから、今その中の第二章 Individual Positions の而も essence とも言ふべきことのみを列舉して見ようと思ふ。

(1) Full - Back

○條件——強い Kick を持ち、良き Position Play たること。その上に身體が強大で早く走れば申し分ない。

○實際にあたつて、先づ自分の前に居る Wing-Half と、mark する相手を決める事（どちらが Wing を、どちらが Inside を mark するかを決める事）が大切である。此の決定が基となつて Team 全體の布陣が定るのである。

○Tackle を多くすると疲れるから、頭を働かせて Position play をやり、敵の Pass (殊に Wing への Long Pass) をカットするやうに掛ける。

○2人のFull-Back が goal-line と平行に一線になることは注意すべきで、かうする一般に此の線が下り氣味になつて、敵の Forward は球を持つてから Full-Back が Tackle する前に相當時間がかかるからその中に十分に control してしまふ。

○Full-Back は dribble すべからず。又 tackle されるまで球を持つてゐることは絶対にいけない。切迫した場合にはタツチへ蹴り出すか Goal Keeper に戻すか、最後の手段としては敵に Corner をあたへても仕方がない。而し兎に角 Full Back が球を持つてゐて敵に Tackle されると言ふやうな不覺なことをしてはいけない。Keeper は back pass する場合には注意深い鋭い判断が必要である。

○すべて Clearance は殊に餘裕のある場合には Pass の積りで出さねばならない。而しで必ずしも Forward へ直接に出さないでもよい。又 Forward より前の方へ出しすぎはいけない。

○Goal 前では Stopping 等しないで direct に蹴り出すかさもなければなるべく遠くへ head すべきである。

○Tackle に向ふ時間思慮深くして行くべきで遮二無二突進すべきでない。Sliding Tackle は後の體勢が回復困難となるから、最後のドタン場以外にはあまり用ふべきでない。

○direct に kick することが大切だから、他の如何なる Position の者よりも一層兩足が自由に使へることが極めて重要である。

○出来るだけ Keeper を援助する義務がある。それには
×Keeper の視野をさまたげないこと（殊に Free-Kick の場合に）

×Corner-Kick の時とか Keeper がおびき出された後などには Goal-line まで戻つてやること。

×Forward の Charge から守つてやること。

(2) Wing Half

○條件——良き強き Tackler たること
短い距離を速く走れること
正確な鋭い Pass が出せること

○防禦のみでなく攻撃にも参加するのだから、相手を奴隸的に mark してゐてはいけない。敵 Inside を mark すべき場合にも常に前に割つて出る用意をしてゐなくてはならない。そして相手を相當離したら機を見て方向をよく定めて shoot するがよい。

○一流 Team に於ては屢々 2人の Wing-Half が一方の Touch-Line の側でお互に接近して活躍してゐる。

○Wing を mark するやうに命ぜられたら内へ入りすぎてはいけないが、而し敵の Inside が free で危険な場合には之に向ふ。

○攻撃に於ては出来るだけ Pass の方向を變へねばならない。
それには簡単に言つてつの方法がある。

i) 自分の前に居る味方 Inside に Pass する（この場合一般に足の Inside を用ひて kick するといふよりむしろ push する）

ii) 自分の側の Wing-Forward に Pass する（最もよいのは一度内側へ向つて dribble し一轉して鋭い Pass を Wing へ出すやうにすること）

iii) 反対側の味方 Inside 又は Outside-Forward へ早い低い Pass を送る。之は非常に有効である。

總じて之等の Pass は正確に出すこと。又 Forward に眞直に向けるよりも Forward の前に出す方がよい。Pass の方向は出来るだけ最後まで敵に知らさないやうにすること。

○防禦に於て相手を Corner-Flag の方へ追ひ込むことは味方が防禦陣を整へる時間をあたへる上に有効である（即ち所謂 One-Side カットによる）

○ Throw-in は wing Half の必要な義務である。球を正確に眞直に味方の頭又は足下に投げ、そこから直ちに次の活動へ移れるやうにやるべきである。キビキビした球を投げるべきで、フンワリと浮いた球はいけない。Throw-in は速くやつて敵の整はざる隙に乗するのがよい。その爲に Forward は常に動いてみて Half が投げよいやうな色々な姿態を取つてやることである。Throw-in は、一般に輕視され勝ちだが Wing Half と 2 人の Forwards で常に練習して居ればそれだけの効能は必ずある。

○最後に Wing Half は精力的でなくてはならぬから、練習中

短距離疾走も大切だが適宜に長距離も走るべきである。

(3) Centre - Half

Centre-Half の Play に全然異つたつの方法がある。

A) Third-Back Game に於ける Centre-Half

○條件——普通の人より身長の高いこと

Heading に強いこと

忍耐力を持つてゐること（精力的なことではない。あたへられた事だけをやつて他の事に手を出さないことである。又頭脳的 Play は必要でない）

○その任務は相手の Centre-Forward をひたすら mark することである。相手 C. F. がどこへ行かうとも一緒にくつゝいて行き、常に 1・2 碼の所に居なくてはならない。絶對的な危機以外の場合にはこの相手から離れていけない。

○前に述べたやうな資格をそなへて居ればその“Stoppe”といふ役目を果すことは極めて容易で、殊に敵の Insider が球を持って鋭く突込んで來ない場合は全く樂な商賣である。

B) Roving Centre-Half

○條件——背が高く、Heading に強いこと

- 頭脳的 Player たること
非常に精力的なこと
走ることはあまり速くなくてもよいが、早く戻れること
(出過ぎる場合が多いから)
- その役目は Defence 全部をまとめ之を率いて前方の Forward との連絡をつけること。
- 故にその活躍区域は Field の中央全部である。こゝを以て 精力が必要となるのである。
- mark する相手は C. F. であるが、之にへばりついてゐては ならない。攻撃に於ては follow up して出来るだけ援助する。即ち速く低い Pass を Insides や outsides に送る。事實上 彼が攻撃を指導すると言ふも過言ではない。
- この場合風の方向・敵の弱點・味方 Forward の個人々々の 力なぞを考慮すべきである。
- 非常に責任のある役割を演ずるから Captain の役目として 誠に相應しい。
- (4) Wing-Forward
- 條件——速力、而も正確な Ball-Control を保つて(身長とか 體力は大して必要でない)
兩足とも使へねばならない(屢々一方の足だけ使へれば よいと云ふ風に誤られ勝ちであるが Stopping とか Centering とか Shooting の際に大いに必要なことである。左右どちらの Wing でも出来るやうになるのが一番よいのである)
- 自ら解決すべき重要なこととして Position Play の問題がある。之は大體次の 3 つの原則に依る。
- i) 常に Touch-line から 5—6 碼離れて居なくてはならない。
かうして活動の餘地を残して置かないと相手の Tackle を 容易ならしめて了ふ。
 - ii) 味方の Defence は危険を切抜ける時に Half-way Flag を 目がけて Long Kick するから之を取つてやることも考へねばならない。
 - iii) Touch-line の側にへばり着いて居ないで時々は内に切 れ込んで Shoot もしなくてはならない。
- 現代の Wing の目標は Corner-Flag にあらずして Goal である。
- 一般の場合相手の Defence は Field の内側から Tackle して

来る形になるから、之をうまく釣つて抜かねばならない。内側に切れ込むと見せて外へ廻つたり、又はその反対の方法をとつたりして相手をカモるやうにする。之で駄目だつたら大きく前へ蹴つて Speed で抜くか、又は Inside か Wing-Half に Pass して自分はゲンと前へ出て Return-Pass を受け るやうにするとか云つた方法をとる。

○味方の陣へ向つて back することは禁物である。何となれば敵の Defence に戻る時間があたへるのみならずいざ Pass をしようとするとき Inside が Off-Side になつてゐる場合が多いからである。

○而し内側に持ち込んでから Position Change をした Inside に Pass を出すことは伸々有効であるが、たまに用ふべきである。

○Corner-Kick は大切な任務である。目標は原則として遠い方の Goal-Post の前方 8 碼位の所である。Goal の後ろに球を出したりしたら全然申譯けない。Corner-Kick に 2 つの方法がある。左の Wing で云へば右足を用ひて蹴る場合と左足を用ひて蹴る場合である。

○Cen'ering も大切な任務の一つである。原則として Goal より 向ふ側を狙つて深く出し、而も Goal Keeper が飛び出して 来て真先に取ることが出来ないやうな所へ送るのである。

○最後に Wing は静止して居勝ちであるが、不斷に動いてゐて刻々變化する状勢に適應し、又球が來た場合などに直ちに Starting が出るやうにしてなくてはならない。

(5) Inside - Forward

○條件——疲れを知らぬ働き手たること。90 分間始めから終りまで最高度の活動を續けられるやうでなくてはいけない

正確な Pass を出せること

非常に良き Dribbler たること

その他の Ball Control も完全に出来ること

○攻撃と防禦の連絡をし、又もれ球を取るために少くとも 一人の Inside は下つてゐるのがよい。一般的に良い方法としては、一人が Wing, Centre-Forward の線から 10 碼位後方に、他の一人は更にそ後方 10 碼位の所に位置するのである。此の不規則な W 型は、個人の技倆とか、攻防何れに力を置く

- べきか等によつて、深くも淺くも出来るのである。
- Inside-Forward は一軍の Key Man である。攻撃のキッカケをつくるのは彼である。
 - 彼は又 Field に於て最も激しく動く Player である。
 - その任務は以下のことも分る通り非常に重要である。
攻撃、防禦両方面の活動をすること。つまり如何なる場合にも立會はなくてはならない。
中盤に於て Dribble によつて攻撃のキッカケをつくること
Wing からの Centring を Shoot するのは大てい彼の役目である。相手の Half が球を持つてゐる場合には悩まずたゆまず Tackle-back しなくてはならない。
自分の側の Throw-in には常に立會ひ、反対側の時には適當な位置を占めて待機する
 - Goal に向つてまつしぐらの突進出来れば一番よいが、もしそれが出来ない時には相手を引寄せてから味方の空いてゐる者へ正確な Pass を出してやるやうにする
 - 兩 Wing と Centre-Forward が特別に優秀な選手でない時に

は Inside が 2 人とも下るのはよくない。交互に上つたり下つたりするか、又は一方の Inside だけが常に下つてゐるやうにする。(而し少くとも Team としては 4 人の有能なゴール・ゲッターは欲しい)

- Inside Forward は位置に捉はれてはいけない。 Third-Back Game に於ては Wing-Half と同様、どこへ動いて行つてもよい。即ち Roving Centre Half の役目をやるわけである。(Third-Back Game に於ては Wing-Half と Inside とは明瞭に區別する必要はない)
- 要するに一軍の勝敗の鍵を握つてゐる者は實に彼 Inside-Forward なのである。

(6) Centre-Forward

- 條件——左右何れの足を用ひても良い Shoot が出来ること
熱烈なる意氣と勇氣を持つこと
體が頑強で身長が高い力がよい
Heading に巧みなること
- Third-Back Game 等に於ては殊にピツタリと mark されてゐるから、自分の所へ來る Chance は少い。この少い Chance

を生かすか殺すかが問題なのである。

○又年中くつ着かれてゐるから相手が上手い時には試合中全く影がうすくなつて了ふ。此の時に於てこそひるまさる熱烈なる意氣と「何糞」と云ふ精神がものを言ふのである。常に相手Centre-Halfの意表に出て之を出し抜く新しい事を考へてゐなくてはならないのである。

○Centre-Forward に2つの型がある。

i) 自己を Team の中心と考へて行動する型で。極端に言へば Team 全部が C. F. のために Chance をつくり、彼が之を活用するのである。

従つて非常に秀れた Player でなくてはならない。即ち左右何れの足でも強い Shoot が出来、Dribble が巧みで、殊に短い距離を銳く dash しながら球を control 出来なければいけない。

又常に On-side の位置に居るやうに注意してゐなくてはならない。之は仲々困難なことで Inside 等が C. F. に Pass する時などは定石として敵の Defence を誘出してからやるのだから、どうしても Off-side になり勝ちなのである。

ii) 之は自分を Forward の線の中にあつて之を結びつける一點として働く型である。
この場合には Chance を活用するのみならず、他の者に對して Chance をつくつてやるやうにしなくてはならない。而し Inside のやうに自分の Normal Position から離れて漂ひ歩いてはいけない。従つて防禦を援けに戻つてはならないのである。たゞし敵の Throw-in の時には相手 Centre-Half を mark しなくてはならない。之は忘れ勝ちなことであるが、常に注意してゐるべきである。

○C. F. の Heading は中盤に於けるものと異つて Centng 等を適當に heading down するのである。屢々自分が Goal に向つて Heading するよりも Inside その他の自分よりも Shoot するに良い位置に居る者の足下へ Heading down してやつた方がよい場合がある。こゝに於て背の高いことが有利となるのである。

○又彼は相手と衝突したり競り合つたりする場合が非常に多いのであるから頑強な體を持つてゐる方がよいのである。

○最後に C. F. は出来るだけ強く、又出来るだけ屢々 Shoot す

べきである。

彼はその位置の關係上色々な角度から Shoot するといふやうなことはあまり必要ではないが、とにかくあらゆる機會に於て Keeper の意表に出るやうに心掛けてゐなくてはならない。

敵前で味方からの Pass 等を control する餘裕のない時には、direct に Shoot して了ふべきである。

勿論兩足を自由に使ひ球を出来るだけ低く蹴るのである。

(7) Goal - Keeper

○條件——敏捷なること

「カン」の鋭いこと

背の高いこと

○motto——「安全第一」 即ち常に手を用ひて完全に catch すること。常に手の後に身體又は脚をそへること。

○Keeper の Kick は出来るだけ遠くに居る mark されてゐない味方へ、正確に球を送ること。而し出駄羅目に高い球を蹴るよりは、投げてもよいから近くに居る味方へ正確に出した方がよい。

○球を catch したらカンを動かして「直ちに」 clear するがよい。二進も三進も行かなくなつてから、見世物的な save をしたり、敵に Corner をあたへたりするのは全然いけない。

○高い centering や Corner kick が來た時に、敵が近くに居たら catch するより fist する方がよい。

○Forward が charge して來た場合とか、又は Field の状態の悪い時などに不必要に多く球をつくことはよくない。

○最も大切なことは Goal から離れて突進すべき時機を判断することである。之は非常に困難なことであるが、球を確實に取れると思った場合か、絶対絶命といふ場合に行ふべきである。後者の場合相手を間誤つかせるとか角度をせばめて目標を小さくするやうに行ふのである。

○耐久力はあまり必要でないが、短かい鋭い dash、高く跳ぶこと、正確なる Pace Kick 等をよく練習すべきである。
す

べきである。

彼はその位置の關係上色々な角度から Shoot するといふやうなことはあまり必要ではないが、とにかくあらゆる機會に於て Keeper の意表に出るやうに心掛けてゐなくてはならない。

敵前で味方からの Pass 等を control する餘裕のない時には、

direct に Shoot してアふべきである。

勿論兩足を自由に使ひ球を出来るだけ低く蹴るのである。

(7) Goal - Keeper

○條件——敏捷なること

「カン」の銃いこと

背の高いこと

○motto——「安全第一」即ち常に手を用ひて完全に catch すること。常に手の後に身體又は脚をそへること。

○Keeper の Kick は出来るだけ遠くに居る mark されてゐない味方へ、正確に球を送ること。而し出駄羅目に高い球を蹴るよりは、投げてもよいから近くに居る味方へ正確に出しだ方がよい。

○球を catch したらカンを動かして「直ちに」 clear するがよい。二進も三進も行かなくなつてから、見世物的な save をしたり、敵に Corner をあたへたりするのは全然いけない。

○高い centering や Corner kick が来た時に、敵が近くに居たら

catch するより fistng away する方がよい。

○Forward が charge して來た場合とか、又は Field の状態の悪い時などに不必要に多く球をつくことはよくない。

○最も大切なことは Goal から離れて突進すべき時機を判断する事である。之は非常に困難な事であるが、球を確實に取れると思つた場合か、絶対絶命といふ場合に行ふべきである。後者の場合相手を間誤つかせるとか角度をせばめて目標を小さくするやうに行ふのである。

○耐久力はあまり必要でないが、短かい銃い dash、高く跳ぶこと、正確なる Pace Kick 等をよく練習すべきである。

昭和十一年度戦績

○四月廿二日(土)

慶應4-2商大

○四月廿二十九日(木)

商大1-軍3-3慶應1-軍

○五月一一日(土)

商大3-1文理大

○五月九日(日)(綜合選手権)

商大1-1明大(抽籤勝)

○五月十日(日)(同)

早大6-0商大

○五月十八日(火)

豫科4-1中央豫科(豫科リーグ)

○五月三十日(月)

豫科6-1立教豫科(同)

○五月四日(金)

豫科6-1慶應豫科(同)

○五月十一日(土)

豫科2-1浦和高校

○六月十一日(日)

豫科4-2農大豫科

○九月十八日(土)

對立教大學

於石神井

商大3 {2-0} 0 立教

F	W	H	B	F	B
田樹山	井井	西野	堂	橋木	GK
大	片	村	小早	澤	12
林	大	金	二	C.K.	8
大	片	村	高鈴	7	2
井	村	金	吉	3	0
井	菅	井瀬	P.K.	1	
井	菅	(岩崎)			

前半五分片山より林田へバス、林田シュートして下點。十五分、更に片山のシュート決る。後半十五分林田ドリブルして中へ切れ込み中へ返し、片山ひつかけて一點、その後ペナルティを得るも外る。

商大 3 2 1 0 1 高

明	大	商	大	商	大	田	掛	岡	(櫻井)	松岡
清	水	大	水	大	水	掛	岡	尾	井	村
山	島	商	島	專	商	大	松	池	小	早
中	片	[大	岡	間	[手	大	片	池	早	崎
南	南	松	井	部	島	松	金	井	岩	西
		片	井		倉	大	大	村	吉	野
		金	井		井	片	片	高	喜	堂
		村	井		田	林	金	鈴	江	橋
									若	藤
										澤

14 G. K 19
3 C. K 11
11 F. K 9
1 P. K 0

20 G. K 17
6 C. K 7
1 F. K 0

○十月卅日(日)二車對專問部
於國立專問部球場

專問部	4	2	1	0	1	0	武	高	於	東	高
	3	1	1	0							

商大 2 2 1 0 0 武高
於東高

○九月二十二日(日)對武藏高校戰
後半日沒の爲十五分にして終る。

高	田	田	尻	野	F. W	林	大	松	池	村
一	原	喜	江	若	H. B	小	早	岩	西	野
						早	二	崎	崎	崎
						二	高	橋	高	橋
						高	鈴	木	鈴	木
						鈴	吉	澤	吉	澤

高田 田尻野 甲內津 小早岩 西野崎 橋木
一原 喜江若 上山水 大郭 竹 高鈴 吉澤
内 G. K 吉澤

七十分を殆ど押し切りに攻めたが入らず、後半タイムアツ
ブ五分前に二點續けて入つたのみ。

○十月四日(日)對帝國大學(リーグ第一戰)

神 埠

商大 3 2 1 1 2 商大

○十月二十五日(月)對帝大LB戰
於本鄉帝大球場

帝	大	大	屋	腰	藤	高山	F. W	大	掛	岡	山	(櫻井)
松	大	竹	後	藤	高	山		大	片	金	井	井
大	片	築	島	築	島	高		小	西	早	野	木
村	金	高	島	高	島	橋		早	鈴	鈴	鈴	木
楓	岡	築	築	築	築	築		高	橋	橋	橋	岩
橋	田	築	築	築	築	築		鈴	後	後	後	岩
								宮	本	吉	吉	澤

帝松大高森奥 屬種田 菊藤 岩
鈴木主將足の負傷の爲欠場。タイムアップ直前のフリーキ
ックを村井よく決めたが、結局第一戦を失ふ。

○十月二十二日(日)對武藏高校戰

○拾壹月四日(木)對明治大學(リーグ第二戰)
於本郷帝大球場

商	大	水	大	水	大	清	吉	池	淵	菅
大	水	田	水	尾	水	井	井	淵	菅	井
商	大	手	手	上	尾	手	櫻	井	菅	井
大	水	島	島	瀨	尾	井	井	井	菅	井
商	大	片	片	瀨	上	瀨	尾	尾	菅	井
大	水	金	金	瀨	瀨	瀨	井	井	菅	井
商	大	村	村	瀨	瀨	瀨	井	井	菅	井
大	水	岡	岡	瀨	瀨	瀨	井	井	菅	井
商	大	井	井	瀨	瀨	瀨	井	井	菅	井

○十一月十三日(土)對早稻田大學(リーグ第三戰)
於東高球場

早	大	4	2	2	1	0	0	商	大	掛	岡	(櫻井)
		3	1	1	0							

鳴呼、何と呪はた試合だつたらう。前半二十分、後半三
十分押し切りに攻め、數多のシュート悉く外れ、一點をも
得ず、反つて前半ばゴール前混戦戦より片岡の瓜先で突
いたシユートトが不幸にも吉澤の右手をかすめ、後半逆襲に
よる清水(明)のノーマークのシュート決り敗戦の涙を呑む

○十一月十七日(水)對專問部於小平

商	大	2	2	0	1	1	0	1	專	問	部
		3	1	1	0						

此の試合より村井がC・Fに入り、R・Wに菅瀬入る。又
もや零敗す。

科 水岡山井上 尾野木 崎川 澤

科 水岡山井上 尾野木 崎川 澤

豫 清松片金淵

豫 清松片金淵

100

F.W 羽田田木黒

F.W 羽田田木黒

100

H.B 下草賀

H.B 下草賀

100

F.B 宮荒岡浦

F.B 宮荒岡浦

100

G.K 伊知地

G.K 伊知地

100

3 12

3 12

1 C.K 1 F.K

1 C.K 1 F.K

18 G.K

18 G.K

1 F.K

1 F.K

前半、八分宮崎—清水一片山と渡り、片山きれいに決る。十六分鈴木よりゴール前片山に出、フリーキュート見事に入る。二十一分金井—清水—金井と渡り、金井のシュートを極める。二十三分片山敵バツクの間を抜け、金井にパス金井之を極める。二十四分ゴール前混戦より出た球を松岡決め入る。三十四分左CKをキーパー叩いた所を金井シュートして入る。後半二分、早野のヘッドで前後に落るを片山極める。十一分ゴール前混戦より金井のシュート決る。高千穂のバツクは球に吊られ、我軍のシュートは殆どフリーであつた。

○十二月廿七日(日) 豊科對專問部

於代田橋球場 (高商大會第三日關東決勝戰)

豫科 3 $\begin{smallmatrix} 1 & 1 \\ 2 & 0 \end{smallmatrix}$ 0 專問部

高商大會出場の豫科レギュラーを除き、然も鈴木、小西、岩崎のバツクメン缺場の爲め新人を以て固めた布陣も、前半一點のリードを得たが、後半グランドに馴れて來た敵の猛攻にあへなくついえて去つた。茂木、水島、村木の新人連の捨身の防戦ぶりは涙ぐましきものがあつた。

○十二月廿八日(木) (豫科對同志社高商)

於代田橋球場 (高商大會決帝戰)

豫科 7 $\begin{smallmatrix} 3 & 1 \\ 4 & 0 \end{smallmatrix}$ 0 同志社

大 水岡山井井 尾野木 崎川 澤

商 清松片金櫻 $\begin{smallmatrix} 4 & 1 \\ 1 & 0 \end{smallmatrix}$ 0 同志社

F.W 利永田原本 $\begin{smallmatrix} 14 & 7 \\ 5 & 19 \end{smallmatrix}$

H.B 川津代 山 $\begin{smallmatrix} 16 & 7 \\ 5 & 19 \end{smallmatrix}$

G.K 毛德植川山 中中八 黃中 植

前半キツフオの球をそのまゝ片山中へ持ち込みシュートが左隅を破る。二十分堀尾—金井—片山と渡り、片山極める

三十七分清水のセンターリング櫻井ストップしてそれを片山シューントして入る。後半十七分F・Kを松岡—金井と渡り、金井決める。二十四分片山—金井片山と渡り片山極め

る。三十九分左C・Kより金井のクリーンシュート右に入る四十四分櫻井のセンターリング片山極める。遂に再び全國高商大會に覇を唱へる。引き續、對大阪商科大學戰。

東京 9 $\begin{smallmatrix} 3 & 1 \\ 6 & 0 \end{smallmatrix}$ 1 大阪

塚尾掛井瀬 堂島木 木藤 森

藤池大村菅 隆堂島木 木藤 森

F.W 藤池大村菅 隆堂島木 木藤 森

H.B 二水茂 村後 狩

G.K 二水茂 村後 狩

G.K 二水茂 村後 狩

此の試合を以て昭和十二度のシーザン終了す。尙高商大會の組合せ及び結果は、

(1) 大倉高商
二十六日 (2) 高千穗高商
二十六日 (3) 商大豫科
同 (4) 高千穗高商
同 (5) 商大豫科
同 (6) 高千穗高商
二十五日 (7) 商大豫科
同 (8) 商大豫科
同 (9) 横濱商專
同 (10) 横濱高商
同 (11) 横濱高商
同 (12) 横濱高商
同 (13) 横濱高商
同 (14) 横濱高商
同 (15) 横濱高商
同 (16) 横濱高商
同 (17) 横濱高商
同 (18) 横濱高商
同 (19) 横濱高商
同 (20) 横濱高商
同 (21) 横濱高商
同 (22) 横濱高商
同 (23) 横濱高商
同 (24) 横濱高商
同 (25) 横濱高商
同 (26) 横濱高商
同 (27) 横濱高商
同 (28) 横濱高商
同 (29) 横濱高商
同 (30) 横濱高商
同 (31) 横濱高商
同 (32) 横濱高商
同 (33) 横濱高商
同 (34) 横濱高商
同 (35) 横濱高商
同 (36) 横濱高商
同 (37) 横濱高商
同 (38) 横濱高商
同 (39) 横濱高商
同 (40) 横濱高商
同 (41) 横濱高商
同 (42) 横濱高商
同 (43) 横濱高商
同 (44) 横濱高商
同 (45) 横濱高商
同 (46) 横濱高商
同 (47) 横濱高商
同 (48) 横濱高商
同 (49) 横濱高商
同 (50) 横濱高商
同 (51) 横濱高商
同 (52) 横濱高商
同 (53) 横濱高商
同 (54) 横濱高商
同 (55) 横濱高商
同 (56) 横濱高商
同 (57) 横濱高商
同 (58) 横濱高商
同 (59) 横濱高商
同 (60) 横濱高商
同 (61) 横濱高商
同 (62) 横濱高商
同 (63) 横濱高商
同 (64) 横濱高商
同 (65) 横濱高商
同 (66) 横濱高商
同 (67) 横濱高商
同 (68) 横濱高商
同 (69) 横濱高商
同 (70) 横濱高商
同 (71) 横濱高商
同 (72) 横濱高商
同 (73) 横濱高商
同 (74) 横濱高商
同 (75) 横濱高商
同 (76) 横濱高商
同 (77) 横濱高商
同 (78) 横濱高商
同 (79) 横濱高商
同 (80) 横濱高商
同 (81) 横濱高商
同 (82) 横濱高商
同 (83) 横濱高商
同 (84) 横濱高商
同 (85) 横濱高商
同 (86) 横濱高商
同 (87) 横濱高商
同 (88) 横濱高商
同 (89) 横濱高商
同 (90) 横濱高商
同 (91) 横濱高商
同 (92) 横濱高商
同 (93) 横濱高商
同 (94) 横濱高商
同 (95) 横濱高商
同 (96) 横濱高商
同 (97) 横濱高商
同 (98) 横濱高商
同 (99) 横濱高商
同 (100) 横濱高商
同 (101) 横濱高商
同 (102) 横濱高商
同 (103) 横濱高商
同 (104) 横濱高商
同 (105) 横濱高商
同 (106) 横濱高商
同 (107) 横濱高商
同 (108) 横濱高商
同 (109) 横濱高商
同 (110) 横濱高商
同 (111) 横濱高商
同 (112) 横濱高商
同 (113) 横濱高商
同 (114) 横濱高商
同 (115) 横濱高商
同 (116) 横濱高商
同 (117) 横濱高商
同 (118) 横濱高商
同 (119) 横濱高商
同 (120) 横濱高商
同 (121) 横濱高商
同 (122) 横濱高商
同 (123) 横濱高商
同 (124) 横濱高商
同 (125) 横濱高商
同 (126) 横濱高商
同 (127) 横濱高商
同 (128) 横濱高商
同 (129) 横濱高商
同 (130) 横濱高商
同 (131) 横濱高商
同 (132) 横濱高商
同 (133) 横濱高商
同 (134) 横濱高商
同 (135) 横濱高商
同 (136) 横濱高商
同 (137) 横濱高商
同 (138) 横濱高商
同 (139) 横濱高商
同 (140) 横濱高商
同 (141) 横濱高商
同 (142) 横濱高商
同 (143) 横濱高商
同 (144) 横濱高商
同 (145) 横濱高商
同 (146) 横濱高商
同 (147) 横濱高商
同 (148) 横濱高商
同 (149) 横濱高商
同 (150) 横濱高商
同 (151) 横濱高商
同 (152) 横濱高商
同 (153) 横濱高商
同 (154) 横濱高商
同 (155) 横濱高商
同 (156) 横濱高商
同 (157) 横濱高商
同 (158) 横濱高商
同 (159) 横濱高商
同 (160) 横濱高商
同 (161) 横濱高商
同 (162) 横濱高商
同 (163) 横濱高商
同 (164) 横濱高商
同 (165) 横濱高商
同 (166) 横濱高商
同 (167) 横濱高商
同 (168) 横濱高商
同 (169) 横濱高商
同 (170) 横濱高商
同 (171) 横濱高商
同 (172) 横濱高商
同 (173) 横濱高商
同 (174) 横濱高商
同 (175) 横濱高商
同 (176) 横濱高商
同 (177) 横濱高商
同 (178) 横濱高商
同 (179) 横濱高商
同 (180) 横濱高商
同 (181) 横濱高商
同 (182) 横濱高商
同 (183) 横濱高商
同 (184) 横濱高商
同 (185) 横濱高商
同 (186) 横濱高商
同 (187) 横濱高商
同 (188) 横濱高商
同 (189) 横濱高商
同 (190) 横濱高商
同 (191) 横濱高商
同 (192) 横濱高商
同 (193) 横濱高商
同 (194) 横濱高商
同 (195) 横濱高商
同 (196) 横濱高商
同 (197) 横濱高商
同 (198) 横濱高商
同 (199) 横濱高商
同 (200) 横濱高商
同 (201) 横濱高商
同 (202) 横濱高商
同 (203) 横濱高商
同 (204) 横濱高商
同 (205) 横濱高商
同 (206) 横濱高商
同 (207) 横濱高商
同 (208) 横濱高商
同 (209) 横濱高商
同 (210) 横濱高商
同 (211) 横濱高商
同 (212) 横濱高商
同 (213) 横濱高商
同 (214) 横濱高商
同 (215) 横濱高商
同 (216) 横濱高商
同 (217) 横濱高商
同 (218) 横濱高商
同 (219) 横濱高商
同 (220) 横濱高商
同 (221) 横濱高商
同 (222) 横濱高商
同 (223) 横濱高商
同 (224) 横濱高商
同 (225) 横濱高商
同 (226) 横濱高商
同 (227) 横濱高商
同 (228) 横濱高商
同 (229) 横濱高商
同 (230) 横濱高商
同 (231) 横濱高商
同 (232) 横濱高商
同 (233) 横濱高商
同 (234) 横濱高商
同 (235) 横濱高商
同 (236) 横濱高商
同 (237) 横濱高商
同 (238) 横濱高商
同 (239) 横濱高商
同 (240) 横濱高商
同 (241) 横濱高商
同 (242) 横濱高商
同 (243) 横濱高商
同 (244) 横濱高商
同 (245) 横濱高商
同 (246) 横濱高商
同 (247) 横濱高商
同 (248) 横濱高商
同 (249) 横濱高商
同 (250) 横濱高商
同 (251) 横濱高商
同 (252) 横濱高商
同 (253) 横濱高商
同 (254) 横濱高商
同 (255) 横濱高商
同 (256) 横濱高商
同 (257) 横濱高商
同 (258) 横濱高商
同 (259) 横濱高商
同 (260) 横濱高商
同 (261) 横濱高商
同 (262) 横濱高商
同 (263) 横濱高商
同 (264) 横濱高商
同 (265) 横濱高商
同 (266) 横濱高商
同 (267) 横濱高商
同 (268) 横濱高商
同 (269) 横濱高商
同 (270) 横濱高商
同 (271) 横濱高商
同 (272) 横濱高商
同 (273) 横濱高商
同 (274) 横濱高商
同 (275) 横濱高商
同 (276) 横濱高商
同 (277) 横濱高商
同 (278) 横濱高商
同 (279) 横濱高商
同 (280) 横濱高商
同 (281) 横濱高商
同 (282) 横濱高商
同 (283) 横濱高商
同 (284) 横濱高商
同 (285) 横濱高商
同 (286) 横濱高商
同 (287) 横濱高商
同 (288) 横濱高商
同 (289) 横濱高商
同 (290) 横濱高商
同 (291) 横濱高商
同 (292) 横濱高商
同 (293) 横濱高商
同 (294) 横濱高商
同 (295) 横濱高商
同 (296) 横濱高商
同 (297) 横濱高商
同 (298) 横濱高商
同 (299) 横濱高商
同 (300) 横濱高商
同 (301) 横濱高商
同 (302) 横濱高商
同 (303) 横濱高商
同 (304) 横濱高商
同 (305) 横濱高商
同 (306) 横濱高商
同 (307) 横濱高商
同 (308) 横濱高商
同 (309) 横濱高商
同 (310) 横濱高商
同 (311) 横濱高商
同 (312) 横濱高商
同 (313) 横濱高商
同 (314) 横濱高商
同 (315) 横濱高商
同 (316) 横濱高商
同 (317) 横濱高商
同 (318) 横濱高商
同 (319) 横濱高商
同 (320) 横濱高商
同 (321) 横濱高商
同 (322) 横濱高商
同 (323) 横濱高商
同 (324) 横濱高商
同 (325) 横濱高商
同 (326) 横濱高商
同 (327) 横濱高商
同 (328) 横濱高商
同 (329) 横濱高商
同 (330) 横濱高商
同 (331) 横濱高商
同 (332) 横濱高商
同 (333) 横濱高商
同 (334) 横濱高商
同 (335) 横濱高商
同 (336) 横濱高商
同 (337) 横濱高商
同 (338) 横濱高商
同 (339) 横濱高商
同 (340) 横濱高商
同 (341) 横濱高商
同 (342) 横濱

總試合勝敗。中六數十九、員數九。引分二。

全一橋、試合數十五。勝六、負八、分二。

豫科 十二戰十二勝。

二軍 三戰、一勝一負一分。

又總得點は九〇對六十四で勝。

全一橋、三十二一四十六で負。

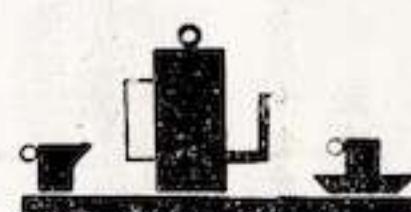
豫科、四十九一八 勝。

二軍、九十一 負。

(石川)

(末回)

春季試合戦績



○五月二日(月) 豫科對帝大新人戦

於帝大球場 小雨

帝大 7 — 2 — 0 — 1 商大

大川 木崎 木島水 嘴上本木井

商居 村宮 茂水清 三淵橋鈴櫻

大西 G. K. F. B. H. B. F. W.

古谷 部山 石村西 田木立島屋

帝長 大力田川 奥直小飯大

(松村)

片山、松岡の缺場と未だコムビネーション整はざるにも拘

らず大敵に捨身で打突かつたが敗る。

○五月七日(土) 豫科對武藏高校戦

○五月十五日(日) 豫科對農大豫科(豫科リーグ)

於元住吉法政球場

商大 3 — 3 — 0 — 1 農大

大川 木崎 木山島 芽上本岡井

商居 村宮 鈴片水 三淵橋松櫻

大田 G. K. F. B. H. B. F. W.

内藤 方坂谷 兎松林 部

農里 武佐 貞穂深 定小小成磯

大川 木崎 木山島 芽上本岡井

商居 村宮 鈴片水 三淵橋松櫻

大田 G. K. F. B. H. B. F. W.

内藤 方坂谷 兎松林 部

農里 武佐 貞穂深 定小小成磯

大川 木崎 木山島 芽上本岡井

商居 村宮 鈴片水 三淵橋松櫻

大田 G. K. F. B. H. B. F. W.

内藤 方坂谷 兎松林 部

農里 武佐 貞穂深 定小小成磯

大川 木崎 木山島 芽上本岡井

商居 村宮 鈴片水 三淵橋松櫻

大田 G. K. F. B. H. B. F. W.

内藤 方坂谷 兎松林 部

農里 武佐 貞穂深 定小小成磯

大川 木崎 木山島 芽上本岡井

商居 村宮 鈴片水 三淵橋松櫻

大田 G. K. F. B. H. B. F. W.

農里 武佐 貞穂深 定小小成磯

フオアワーヴのコンビ悪く、又決定的シュート無く無得點にて敗る。

○五月十七日(火) 對帝大戦

於帝大球場 曇時々雨

帝大 2 — 1 — 0 — 0 商大

大澤川橋崎野瀬田尾井水
商吉荒高岩日小菅吉池金清

大勤島山村池田木部規村

帝岩築大田菊屬奥直阿大松

前半十五分直木のシューートがバックの躰に當り阿部之を拾つてシートし先取さる。後半八分松村のセンターリングを小西足を上げて落した所を奥田に決められる。此の試合始めから元氣なく味方のシューートらしきものは一本もなく得點差こそ餘りないが、大敗ともいふべき試合であつた。

○五月二十一日(土) 対豊島サッカー戦(綜合選手権)
於青山師範球場

豊師0
 $\overline{0\ 0\ 0\ 0}$
 $\overline{0\ 1\ 0\ 0}$
 $\overline{0\ 0\ 0\ 0}$
商大(抽籤負)

大澤川橋崎野瀬田尾井水
商吉荒高岩早小菅吉池金清
島木島澤黒川田澤川澤藤
並大須瀧小前村松清金伊

14 G. K. 7
3 C. K. 10
5 F. K. 6

3 G. K. 14
10 C. K. 3
4 F. K. 2

七分三分の有利な試合を無得點に終つた。フリーシュートのチャンスも度々あつたが皆なキーパーの正面とか或はオーバーして一點も決められなかつた。

○五月十九日(木) 豫科対中央豫科(豫科リーグ)

於東伏見球場

商大3
 $\overline{2\ 1\ 0}$
0 中大

大川木崎木山島菅上本岡井

商居村宮鈴片水三淵橋松櫻
大我下村中邊本木川

中曾山金中田渡千李山青米

前半十五分三觜より櫻井から松岡にパス、松岡のシューート決る。後半十六分松岡P・Kを決める。更に三十分橋本バックからのボールを敵バックを突切つてシューート。此の日豫科チームは敵のダレた氣分に幾分調子を落し、シューートの數も二十本もあるに拘らず三點を得ただけであつた。グランドの状態も悪かつたが、殆ど押し切りになつて居て點の少なかつたのは注意すべき事である。

○五月卅一日 豫科対法政豫科

島木島澤黒川田澤川澤藤
並大須瀧小前村松清金伊

於小平(豫科リーグ)

商大4
 $\overline{3\ 1\ 1}$
1 法政

大川木水木山島菅上井岡塚

商居村清鈴片水三淵櫻松藤

G. K. F. B. H. B. F. W.

此を以てA組優勝成る。

○六月十二日 豫科対慶應豫科

於日吉臺球場(豫科リーグ決勝戦)

慶應4
 $\overline{1\ 1\ 1}$
1 商大

大川木崎木山水菅上井岡塚

商居村宮鈴片清三淵櫻松藤

G. K. F. B. H. B. F. W.

原島川池邊畑笠高石尾渡小

浦和3
 $\overline{1\ 1\ 0}$
2 商大

大川木崎木山水菅上本岡井

商居村宮鈴片清三淵橋松櫻

G. K. F. B. H. B. F. W.

和本島瀬田馬森水島田川中

浦岡小奥濱有宮清奥種加田

G. K. F. B. H. B. F. W.

前半、七分敵右のC・KをC・Fに決めらる。十四分味方I・Rからの流した球を敵バック逃した所を櫻井シューート。

十六分敵J・HからC・Fへ出しシューートされる。十七分、味方の左からのC・Kを右に流して三觜シューートして再度同點となる。後半一分にしてC・F敵種田に決められたがその後押し盛にシューートするも、キーパー正面、或はバーに當つて不運にも一點も突き込み得ず、久しく敗れたる事の無い浦和に敗る。

此れにて春期シーズンを閉づ。

小雨の中を奮闘したが、商大軍グランドに不馴れの爲、又水島、橋本の缺場の爲、覇權を逸す。

一橋蹴球部部員名簿錄

(昭和年十三年十月現在)

編輯部調查

役員表

主委員長 豐田正夫
副委員長 小林英利
委員長 小山木木利
副委員長 武藤大英利
委員長 佐藤正利
副委員長 佐藤英利
委員長 佐藤英利
副委員長 佐藤英利

部長 佐藤弘
世田谷區北澤三ノ九九〇

先輩
—左右勤務所
大正十四年度卒業
兵庫県武庫郡生野町立高木一、八
進藤 靜太郎

（電）御影五、六七八
大阪市北 東梅田町一八
ス合資會社 進藤商店（電）北一、〇二九

大正十四年〔專〕
三 宅 定 夫
自 廣島縣廣島市堺町一ノ二一
營

○ 藤井泰

貿易部(電京橋西一七二十四)

昭和三年
廿二日四月二十一
日車油脂肥料課
和歌山市湊北町一丁目
大日本製氷株式會社
和歌山四三五
大阪出張所

昭和四年
芝巳田村ノ一四(廿二〇八六)
日本セスンリシケ。瀬社家力

昭和五年
有陽生今社农渡邊甚吉
渡岐阜市松屋町一株式會社
(電岐阜三八)
(村吉改)

編輯部調查

杉並區西高井戸一ノ一三九
西高井戸一丁目實業ビル内
花岡法律事務所(電)京橋六〇八六〇
大森區田園通
調布四
電田園調布八
調布五
調布三
調布二
調布一
調布高女校

昭和二年
高橋朝次郎
麻布區廣尾町、二二二五九
麒麟麥酒株式會社(電京橋六、二二二五九)
三商大業日吸ノコロナ通
明石毅
大阪瓦斯株式會社(電南一八〇)

c/o 10 Osaka Shoseu Kaisha Ltd.
Connaut Rode, Central, Honkong.

四一五〇 城島町雄

大森區馬込東一ノ一、〇八

岐阜市松屋町一 渡邊方
名古屋市南区稻永新田
築地電軌株式會社 電岐阜三八〇
電南四四七 級

自牛込營區津久井土町二

豊田達治

化
株會社
式町會社
會區
紀三尾越井
本町
山本
本
松
宣夫

津田弘精

◇在學者姓名 (三五名)

左現住所
歸省地

(二中) 本科三年 (三) 中野區 大和町一 一三
(廣附中) 小西正夫 貞

(三中) 本科三年 (三) 岩崎寬
(湘南中) 廣島縣尾道市土堂町二丹一野五方五方

(四中) 中野區 大和町一 一三
(廣附中) 小西正夫 貞

(五中) 中野區 大和町一 一三
(上野中) 小石川區久堅町七四朗

(六中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 府下吉祥寺五六七 (吉祥寺四一八)

(七中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 杉並區阿佐谷二一ノ五九五新居方

(八中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 杉並區上荻窪一ノ三一 (電荻窪四一二)

(九中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 杉並區宇都宮市大町一二三 (電宇都宮三三三)

(十中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 小石川區早野廣太郎

(十一中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 吉田富彥

(十二中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 荒川守之助

(十三中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 堀尾貞

(十四中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 榎木縣宇都宮市大町一二三 (電宇都宮二二二)

(十五中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 杉並區天沼一ノ二〇

(十六中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 神戶市灘區高羽楠丘一秋葉八方

(十七中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 小石川區駕籠町四六

(十八中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 藤塚亮

(十九中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(二十中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿一中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿二中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿三中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿四中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿五中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿六中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿七中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿八中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(廿九中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(三十中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(三十一中) 中野區 大和町一 一三
(神戶一中) 清水町二〇

(開成中)

(八中)

(飯田中)

(中)

(豫科三年)

(中)

(鈴木英二)

(中)

(杉並區馬橋二ノ一七〇 (中野二七七三))

(中)

(千葉縣東葛飾郡野田町中ノ臺二二二六)

(中)

(中)

(中)

(中)

(中)

(中)

(中)

(中)

(四中)

(中)

(豫科二年 (七))

(中)

(五年)

(中)

(豫科三年 (二))

(中)

(四年)

(中)

(豫科二年 (七))

(中)

(宇都宮中)

山田久寧

杉並區天沼一ノ二〇秋葉一方
福岡縣小倉市上富野四〇六七

(湘南中)

神奈川縣藤澤町羽鳥一〇六七
一橋寮吉岡寧夫茂

(一中)豫一(アシ)

青木育郎

瀧谷區千駄ヶ谷一ノ五六二

(高師附中)

麻一布橋區寮筭町一七

(一中)

杉並區阿佐ヶ谷一ノ八七二

(一中)

世田橋區北澤四ノ五〇三

(一中)

瀧藤俊雄

此のたびの事變によつて我が蹴球部の先輩も戰地に活躍されて居る。
二階堂氏、神野氏、荒井氏は中支に、又水島氏は北支に夫々活躍されて居る。尙淺枝氏、角田氏、森田氏、田島氏は現役兵として服務されてゐる。此等の出征された方々には部員諸君から度々便りを出しませう。

追記

(神戶一中)

(神戸一中)

兵庫縣武庫郡影町郡家千本田一三五ノ一

昭和十三年十月十八日印刷

昭和十三年十月廿一日發行

【非賣品】

蹴球部再建の恩人長瀬東作兄を失ひ此所に一年、一周忌を記念して、長瀬追悼號を發行するに當り、諸先輩から多くの原稿を戴き、誠に有難く存じて居ります。生前兄を直接識る者は本科三年生のみで、他の亡き兄を知らざる多數の者は、今迄以上に兄の偉大さを感じず事と思ひます。尙原稿を早くから備足致しましたが、發行は遅れ、誠に相濟まぬ事と思ひます。

今度の部誌には今迄になく寫眞が少い事は誠に残念ですが、珍らしいのがないのでかうなつた次第ですから、御容赦下さい。

例年の個人漫許は都合に依り廢止しましたが、新に新生紹介を出しました。

金井君の「蹴球部へ」の詩を部歌にしやうとの話も有りますが、誰か作曲志望者は有りませんか?

第五號は全部貢殆ど原稿を出した事には出しましたが、どうも集りが遅いので遺憾です。此からはもつと早く集めて早く發行する様心掛けます。

編輯後記

昭和十三年十月十八日印刷
昭和十三年十月廿一日發行
【非賣品】

東京商科大學内
發行人兼 石割知之

東京市本郷區金助町二九
印刷所 日興舎印刷所

東京市本郷區金助町二九
印制人 杉真一

發行所 東京商大蹴球部